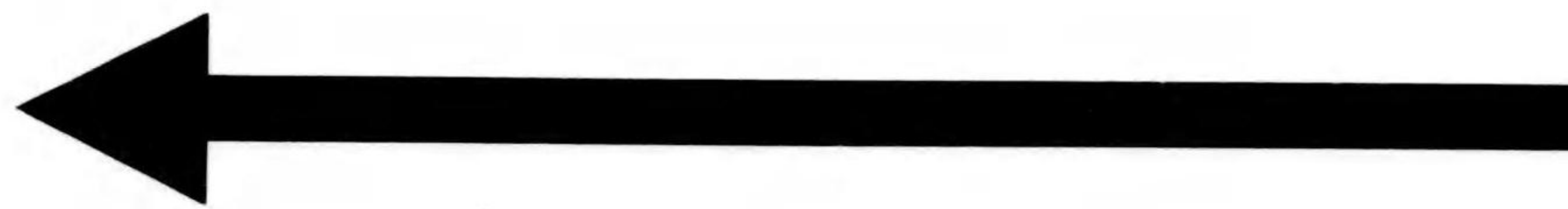


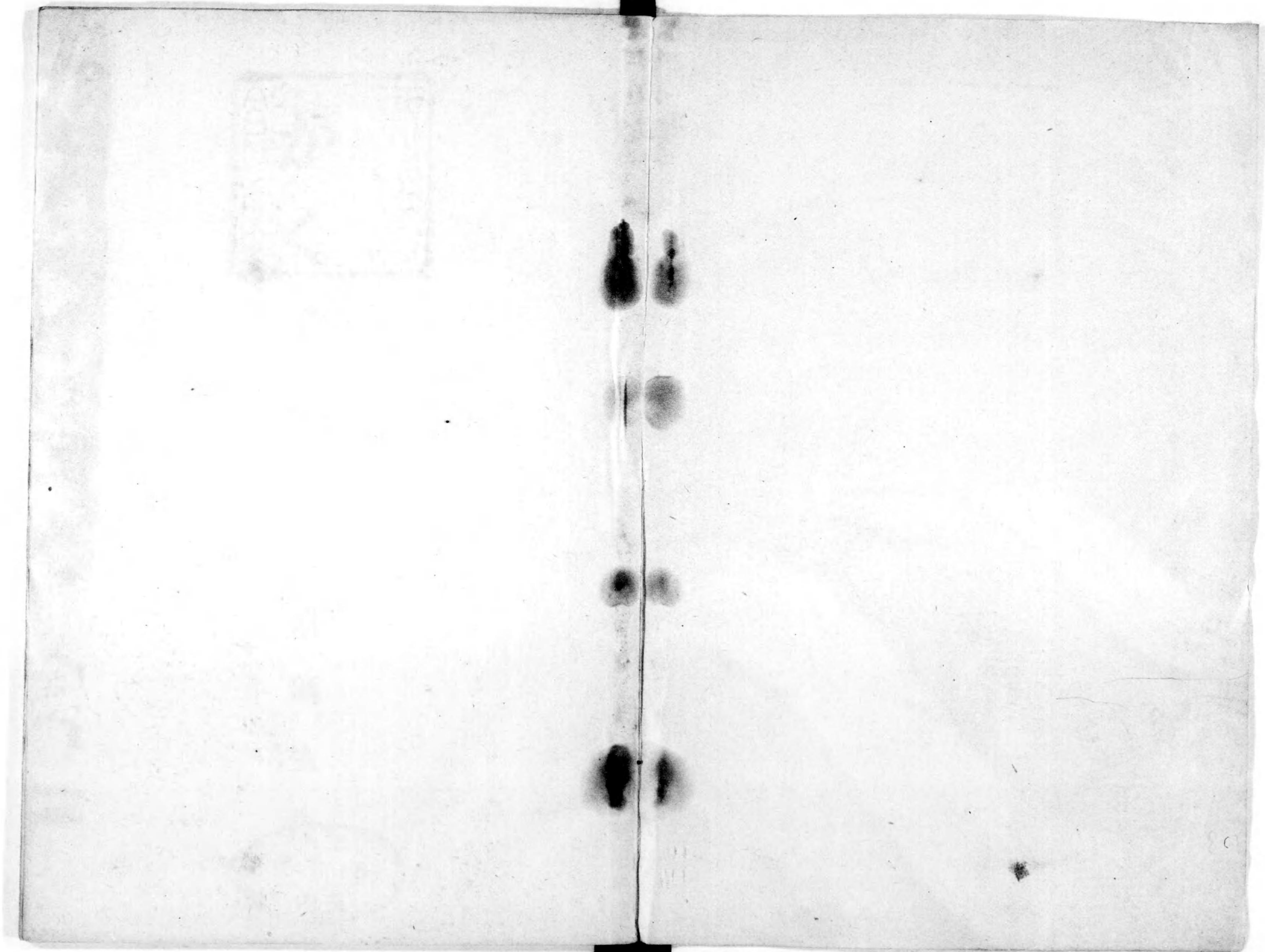
か しく 兒

瑠璃生作



始







かく

し
兒

瑠
璃
生

作



大正 6. 8. 15

内交





■ 樋口隆文館新刊小説目次 ■



齊藤星淵君作	山田松琴君作	和田天華君作	嶋川七石君作	行友李風君作	遠藤柳雨君作	篠原嶺葉君作	齊藤溪舟君作	瑠璃生君作	橋本埋木庵君作	渡邊默禪君作	江見水隆君作
二人の花聾	ゆめのあ	憐れ誰が兒ぞ	密航婦	人怨	須磨子と千代子	田鶴子	八まんな	かまくし	繼しき	紅蓮の	蠻勇の



聞新の地各國全は説するせ版出りよ館文隆口樋
 かすで物たれらへ迎て以を評好の大多てに上紙
 すまいごう自面極至もてれま體なれどら



前篇

一 瑠璃生

「津吉君、此處へ上つて御覽、此處からは残らず一目に見えるよ。」

日比谷公園の躑躅ヶ岡の四阿の前に立つて、岡の下に立つて居る、十五六歳の少年に向つて、恁う辭を掛けたのは、春のすらりと高い、カーキ色の軍服を着た陸軍歩兵大尉で、右方の胸下に陸軍大學生の徽章を附けて居る。所謂威あつて猛からざる美丈夫で、鼻下に蓄へたカイゼル式の髭が、美しい顔に一段の色彩を添へて見せる、名を龍夫、姓を藤川と呼んで、第四師團から拔擢されて、中尉時代に陸軍大學へ入學し



たのであるが、在學中に大尉に昇進して、既に本年は卒業する事になつて居る、年齢は二十八で、修學の成績は常に優秀を示して、未來の好將官をもつて矚目されて居る今日は土曜日であるのを幸ひ、渠が下宿してをる菊岡といふ家の姉弟を引連れて、今を盛りの映山紅を觀に來たのである。

「然うですか、唯今……」

と答へながら、二間ばかり隔つて居る姉を顧みて、

「姉さん、早く入来しやいよ、藤川さんの所から一目に見えるんですッて……」

言ひ棄て、藤川大尉の傍へ上つて來たのは、準吉と呼ぶ十五の少年で、第一中學の製帽を被つて、紺緋の袷に對の羽織を着て、襷の正しい小倉袴を穿いてをる。

「お、綺麗だ。」言ひつゝ、四方を見渡して、

「成程すつかり見えますね、花も綺麗ですが、この人出は何うでせう、大層な人ぢやありませんか。」

「花が真盛りなのに、土曜日だから、それで這麼に賑はふのだらう。」

「では、明日は一層多いでせうね。」

「今日のやうな好天氣だつたら、身動きがならないほど出るだらうね。」

大尉と準吉とが、かゝる談話をしつゝ、眺めて居るところへ、クリーム色のバラソルに日を避けながら、上つて來たのは準吉が姉の清子であつた、小説本の口繪に有りさうな美しい現代的のハイカラ女で、華美な御召の袷に、粹な羽二重の帯を太鼓に締め、空氣草履を穿いて居る。第三高等女學校出の才媛で年齢は二十歳である。

「まあ、何て美しいのでせう。」

言ひつゝ、傍へ寄つた。

「真箇です、これ等が千紫萬紅とでも言ふのでせうね。」

藤川が微笑しつゝ言つた。

「もう今日では、此處の躑躅が一等綺麗ですから、大久保の方は徒目ですッてね。」

「然うでせうとも、第一大久保なんて、土地が不便ですからね。」

「ですけれど、這麼に澤山な見物人がゐても、軍人は一人もゐないぢやありませんか。」

頻りに四方を眺めてをつた準吉が何か發見でも爲たやうに言つた。藤川は笑ながら

「準吉君は相變らず、奇抜な事を發見爲ますね。」

辭の了らぬのに、清子が微笑して、

「迂詐よ……ツイ其先に三人も一緒に居らッしやるぢやありませんか。」

「えッッ、何處に姉さん……」

瞿々胸してをつたが、

「あ、眞箇だ、僕少しも見えなかつた、屹度花の蔭にゐたんだよ。」

「友人ぢやないか知ら……」

藤川が眼を睜つて眺める時、突然其肩を軽く叩いて、

「暫時ぢやないか……」

辭をかけた人がある。藤川は固より、清子も準吉も、共に振返つて見た。

「や、君だつたか」藤川が快濶に言つた。

二

藤川大尉に向つて、不意に辭をかけた男は、黒田鐵彦といふ法政大學出身の辯護士で年齢は三十歳である。色の淺黒い長い顔で、眼光の鋭いので、髭の濃いのが際立つて目に附く、大島耕の袷に縞セルの袴を穿き、黒紋附の羽織を着て中山帽子を冠つてをる。其何故に藤川大尉と知己であるかといふに、この黒田といふは、第四師團長を奉職してをる、大久保中將の甥に當る爲に、渠が法政大學を卒業するまでの學費は中將の手許から、殆んど供給されたのである。それは黒田の家が事業の失敗から破産したのと引續いて父が死去したとの事情から、恩惠的に補助されたのである。かゝる關係があるために、在學中は無論であるが、大學を卒業してから、辯護士試験に登第するまで、絶えず大久保家に寄寓して、東京に出て獨立したのは、今より二年以前、即ち辯護士試験に合格した年の暮であつた。

しかるに、藤川大尉は第四師團の所屬士官で、大久保中將の部下である關係上早くも中將から其俊才を見込まれて、令嬢秋子を妻に貰つて下れないかといふ交渉を受け

たのである。けれども自負心の強い渠は、秋子の美しい容貌は、決して厭ではなかつたが、才を力に恃む所があるだけに、地位婚の爲に、榮進したと、世間や友人から誤解されるのを口惜く思ふて、其理由の下に謝絶したが、中將から再三辭を盡して懇望された結果、止を得ず其希望に従ふ事になつて、陸軍大學卒業後、時機を選むで結婚するまでの契約が結ばれたのであつた、ために中將の宅へは、屢々招かれて遊に往つてゐたので、自然黒田とも懇意になつて、上京した今日も互に、時々訪れ合つて舊交を温めてゐるのである。

黒田は例の鋭い眼光を、閃りと清子の顔に浴せながら、

「先刻から、能く似た軍人だと後姿を見てゐたのだ。」

「では君は何處にゐたのだ。」

藤川が不思議さうに問ねた。

「この四阿の中に腰を掛けて休息してゐたのだ。」

「然うか、花ばかり夢中に成つて見てゐたものだから少しも氣が附かんかつた、一人

かね。」

「委任された事件のことで、相手方の辯護士を訪問して、其歸りがけに寄つたのさ、君はお連があるようだね。」

「あ、宿の人と一緒に來たのだ。」

「然うかそれは愉快だね……時にもう日ならず卒業だね。」

「漸どのことで漕ぎ附けたさ。」

「大久保から音信が在るかね。」

「あ、時々あるよ。」

「卒業すれば彼地へ歸るのかね。」

「それは疑問だね、或は東京に居ることになるかも知れないさ。」

「すると例の契約事件は、東京で舉行するのかね。」

「まだ那樣ことは考へても見ないさ、急ぐ必要もないからね。」

「でも大久保ちや、首を長くして待つてゐたらうよ。」

「那樣ことはないさ、始めから卒業後といふことは覺悟の上だからね。」

「それは然うだが、卒業が待たしからうと思つて察して遣るのさ、は、は、時に日曜を利用するか、夜分にでも遊びに來給へ、今日は失敬為やう。」

「有難ふ、目下試験の準備中であるが、夜分にでも一度御邪魔為やう。」

「些と電話をかけて下れると、必ずお待受するよ。」

「有難う。」

「では失敬。」

「いや失敬。」

黒田は分れて立去つた。

三

黒田の姿が群衆の中に消えて了ふと、準吉は待兼たやう、

「藤川さん、今のは何する方なの、矢張軍人ですか。」

問ひ試みた。

「い、や、彼人は辯護士だ、準吉君には誰を見ても軍人に見えるかね、は、は、は、軽く笑つた。」

「さういふ理ぢやないですが、何だか軍人見たいな顔だから、さうぢやないかと思つたんです。」

すると清子が笑ひながら。

「準吉は、何でも彼でも軍人に成るんださうですから、貴方の御友人は、皆様を軍人だと思つてるのですわ。」

「豈夫さうぢやないけども、今の人は眞箇眼附からお髭の様子が軍人らしく見えたりですもの。」

準吉が言譯らしくいつた。

「成程準吉君のいふ通りだ、彼人の顔は色の淺黒いところから、眼の鋭いところが、軍人に能く在る顔だからね、眞箇さう思ふも無理はないよ。」

「でも、貴方の學友なんですか。」
と問ひ直した。

「學友ではないんだが、大坂に居る頃、師團長閣下の宅で親くなつたのだ。」
「へえ然うですか……」

とはいつたが、準吉はそれだけの説明では満足することが出来なかつた、けれども藤川の迷惑を察して口を噤むた、準吉が満足することが出来ないのには、大いなる理由があるのだ、渠の幼稚な頭脳には、陸軍大學といふものが、絶対無限に崇高なものと成つてをるのに、其大學に藤川が入つてゐるのであるから、渠の藤川を尊敬することは非常なものであるのだ、しかるに其藤川と汝爾の交際をするには單に師團長の宅で會見した位ではない。より以上深い關係が無くてはならないと考へたからである。

「さあ、同じ所にゐても眺に變化が無いから、ぶら／＼と向ふの四阿へ往つて見やうぢやないか、それとも清子さん疲れが出たら、暫時憩ひで往きませうか。」
と清子の顔を見た。

「いえ、まだ疲れませんから、何方へもお供致しますわ。」

「まだ今時分疲れる弱虫が在るもんですか、電車から降りて、此處まで来たばかりぢやありませんか、僕先へ往きますから、後から入來しやいね。」
いひ棄て、匆々と歩み出した。

「逸れると困るから、四阿の中に待つてらつしやいよ。」

清子が注意を與へた。而うして藤川と清子は肩摩するほどの人混の中を、左に右に避けて歩むのであつた。

「懐中物や、裝飾品なぞ注意なさいよ、この雑踏ぢや險呑ですよ。」

藤川が振返つて注意を與へた。清子は「承知致しました。」

と頭の裝飾品や、他の所持品を檢めた。

「昨年も御一緒に來ましたね。」

「は、これで三年お供致します。」

「へえ、一昨年もお供でしたかね。」

いふ時、不良學生らしい四五人の學生が、行方から囂々と大聲を發して來たが清子の顔を見るが否や、

「公園第一の花だね、どうだ星を打つて置いて手折うではないか。」

甲がいへば乙も和して。

「白にしては珍しい花だ、是非實行すべしだ。」

と清子の傍へ故と摺寄つて、突當つたと思ふと、

「萬歳」と一齊に絶叫して、行過て了つた。

「あら、随分失敬な學生ぢやありませんかね、袂の中へこんな書面を入れて往きましたよ。」

と一通の書面を出して藤川へ見せた。

四

藤川は興ありげに

「不良學生が、縁日などの混雑を奇貨として、能く婦女子へ悪戯するといふことは聞いて居ましたが、實地見るのは初めてです、讀むで見ても管ひませんか。」

「管ひませんとも、御随意に御覽下さいまし、屹度莫迦なことが書いてございますわ。」

清子が快くいつた。藤川は歩みながら、封を披いて讀み始めた。

「呼々慕ひまつる美しき嬢よ、我は御身を思ふの情溢れて、失禮をも打忘れて此文を捧げまつる、あはれ露だにも愛する御心の在しませば、來む日曜の午後七時、日比谷公園鶴が池の四阿まで御越し賜りたく、如何に戀ひ参らすかは、其節心行くまで語り申すべく、御覽の後は御破り下され度候。」

戀しき令嬢 御もとへ

大學生

「こんな莫迦氣たことが、空々しく能く書けたものですね、まあ讀んで御覽なさい。」
微笑みつゝ清子へ渡した。清子も笑みつゝ受取つて默讀した。

「随分莫迦々々しいことが書いてございますわね。こんなことで欺される方があるでせうかね。」いひつゝ圓めて棄てた。

「新聞などで見ると、此手で誘惑される女が、幾人あるか知れないさうです。實に意志の弱いものです。清子さんなども、迂濶此手に乗ると大變ですよ。」

「椰楡ふやうにいつた。清子は心ばかり顔を染めて、

「豈夫私か……」

決心あるやうにいつて密と眺めた、藤川はもう向ふの岡の上を眺めて、群衆の中を急ぐやうに進むのであつた。其處には準吉の姿が見えたからである。やがて兩人は準吉のある岡の上に辿り着いて、又一しきり四方の景色を眺めた後、公園の此處彼處を散歩して、松本樓で食事をして家に歸つた。

翻つて清子の袂へ、誘惑的書面を入れた學生風の一團は、公園内の静な樹立の中の草の上に坐つて、喋々と語り合ふのであつた。

「君は幾人挑戦した。」

甲が乙へ問ねた。

「僕は唯た三人さ、君は！」

「僕は五人さ。君はどうちやツた。」

「僕は唯た一人だ。」丙が答へた。

「君は。」と丁へ問ねた。

「僕は一人もなしだ。」

「どうして！」

「機を逸して駄目ちやツた。」

「意氣地がないなあ。」

「君はどうちやツた。」戊に問ねた。

「僕は六人さ。」

すると甲が、巻蓑を喫しつゝ、

「都合十五人命申した理だね、三分の二どうちやらう。」

「三分の一は怪しいかも知れないが、二人や三人は屹度だよ。」
乙が確信あるらしくいつた。

「しかし、夜と異つて晝間見ると、これはと思ふ美人はゐないものだね。」
丁がいへば、丙が受けて、

「恐く僕の挑むた敵が、今日中の美人だらう、あれだけの女は近來見かけないね。」

「だが彼女はミスでないかも知れないよ、どうも先に立つてゐた軍人のワイフらしかつたからね。」丁が推断した。

「僕は確にミスと見込を附けたけれど、外れたかね。」

「しかし、左に右本部へ歸つて、慰勞會を催ふさうぢやないか。」

乙が提案した。

「賛成々々。」

一同立上つて、そろ／＼と公園を出て、やがて芝新網町の大竹ひでと記した標札のあつた、小かなる家に入つた。此處が渠等の本部と定めてあるのだ。

五

不良學生の首領と仰いで居るのは、松崎八五郎といふ、二十五歳の青年で、自らは放蕩ゆえに中學を、中途から退校處分を受けたと、名譽らしく吹聴してをるが、教育などは皆無の在様で、常に兇器を懐中して、不良學生を部下に従はせ赤手組なる不良團を組織して、妙齡の婦女子を誘惑して、墮落の淵に沈め、同性間の劣情を挑み、甚だしきは、學生を威嚇して金品を強要し、或は父兄の金品を密に持出させて略奪するなど、有ゆる悪事を働きながら、巧に世の疑念を避けてをる、其本部を大竹ひで方へ定めたのはひでと松崎とが殆んど夫婦のやうな關係が生じてゐるからである。大竹ひでは大竹幸作といふ、鐵道局に勤めてゐた車掌の妻であつたが、幸作が職務の爲に不慮の死を遂げた爲に、一生を獨身で送らうと、同情者から送られた弔慰金を資本として、煙草や菓子の小賣を開業したのであるが、何しろ女一人の氣樂さは、僅かの利益があれば、生活に窮するやうな憂もなく、只管亡き人の菩提を弔ふて、世を安らかに

に送つてゐた。

ところが、不斗した事から松崎八五郎と親くなつて、八五郎が足繁く出入する中にいつしか妙な關係が結ばれたが、おひでは三十一といふ中年増で、八五郎は其當時二十三といふ青年で、殆んど姉弟ほど年齢が違つてゐた爲に、始めの頃は近所隣家へも關係のある事などは秘密にしてゐたけれども、遂に隠す事のない妊娠の身と成つたので、それからといふものは、恥も外聞も打忘れて、八五郎を内縁の良人として同棲する事になつたのである。先夫幸作とは、十一年間睦しく暮しながら、一子だも擧げなかつた身が、怪しくも僅かの契に妊娠したのであるから、不思議に感じながら、八五郎を愛いすることは非常なもので、何うかして愛されやうと、局外から観るときは、奇しく思はるゝまでに浮身を窺すのであつた、總じて戀には理窟がある理のものではないが、それでも年増女が、年齢下の男と情的關係を生じたほど、總ての上には氣苦勞する事は稀である、古來からの實驗上、女は男に比して容色の衰へ易いものと極が附いてゐるために、其均衡を保つ必要上、各自一定は爲ないけれども、五歳、七

歳、乃至八九歳、それが現時に至つては、十五歳、甚だしきは二十歳位、年下の女と結婚するのが、一般の風習と成つてゐるのに、おひでと八五郎とは、逆比例を示してゐるために、萬事につけておひでが弱者の地位にゐるのである。

しかし八五郎の考へでは、妊娠させたから止むを得ず情交は續けてゐるものゝ、母子ほどにも年齢の違ふおひでと、終生を共に暮さうなどは、夢にも思ふてゐないものであるけれども、渠とても一定の職業があるのではなく、所謂浮浪の身の上であるから、おひでと關係を續けてゐる限りは、遊んでゐても、糊口だけは、何うにか凌ぎ得られる、安心があるために、今に何事か爲し果せやうと、時機の到るを待つてゐたのであるけれども、固より無能の渠に何事が成し得やう、不善の事のみ考へてゐる中に光陰は遠慮なく過去つて、おひでは遂に男子を産むで名を五郎と命名した。この間に八五郎は赤手組なる一團を作つて、今日の如き跋扈を見るまでに、勢力を扶殖したのである。

かくて早くも二ヶ年を経過して、五郎は三歳の春を迎へて、可愛氣盛と成つたが、

生計は年毎に不如意と成つて、今は殆んど親子三人が糊口にすら窮する状態となつた、けれども八五郎は一家の事などは、念頭にも措かず、不良學生と共に夜となく晝となく、若い女の後を尾け廻しなごして、おひでをして嫉妬と、世帯の苦勞とに、涙を絞らせる事も度々あつた。が、おひでは、年齢効もなく若い男と關係した、己の罪を考へて、止を得ない運命と諦めるのであつた。とはいへ時々堪へられぬ嫉妬に、風波を起す事もあつた。

六

大阪東區大手町なる男爵大久保中將家にあつては、令嬢秋子の許嫁である藤川大尉が、目下卒業試験中である旨の書信を寄せたから、その成績の優良を祈ると共に、秋子の結婚準備に就いて、何彼と心を配るのであつた。

「ね、秋子さん、藤川さんから書面が来たさうだが、目下卒業試験の真最中ださうだね、お前さんへは、別に通知はなかつたの？」

秋子の部屋を訪ふて、かう問ねたのは大久保夫人郁世であつた。机に向つて書見をして居た秋子は、欣々と迎へて、

「私へは別に通知はありませんわ、試験中では忙しくて書面を認める餘暇もないからでせう。」

「屹度夜の目も寝ずに勉強してるのでせうね、どうか優等で卒業して下れるやうにと、お父様は、そのことばかり氣を揉んでおらつしやるよ。」

「私もそれを祈つてますけれど、何しろ皆な相當に優れた人達ばかりの寄合ですから容易なことぢやありませんわね。」

「大學を優等で出たものは、直に外國へ留學を命ぜられて、歸朝後も重要な位地を與へられるさうだから、お父様の心配なさるも御無理ないわね。」

「お父様は、藤川ほどの俊才は、日本國中に無いやうな賞方をなさるけれども眞箇それほど出来るかごうですか、這度の試験が試金石ですわね。」と微笑む。

「だけれども、藤川が恩賜の賞品を頂戴すると爲ないとは、當人は無論だけれど、

「お前さんも非常な損益があるのだよ。」
意味あり氣にいふ、

「それはどういふ理由です。何故私に損益がありました！」

「だって、藤川が優等で卒業すれば、お前さんの結婚支度を普通以上に奢つてやる
と、お父様がさう仰やるんだもの、大變な損益ぢやないかね。」

「あら可厭だ、随分ですね、藤川の成績によつて、私の支度が増減するなんて私父様に談判しますわ。」

笑ひつゝいふ、

「だから、優等の成績で卒業するやうに勵ますための書面をおやりなさいよ。」

「だって、そんなことをいつて苦めるのは、氣の毒ですもの、成行に任せられた方が宜ござんすわ。」

「それもさうだわね、なか／＼此方で思つてるやうな、暢氣なものぢやないからね……
……しかし事によると、結婚を急に擧げなければならぬかも知れないから、成たけ

準備を急がなきゃなりませんよ。」

「承知致しましてよ。」

郁世はそのまゝ、部屋を去つた。ところへ女中が来て、一通の郵便をして去つた。

秋子は藤川から来たのではないかと取手遅しと眺めた。けれども書面は、絶えて音信
のなかつた、従兄の黒田鐵彦から寄來したものであつた。

「まあ、鐵彦さんが私に書面を下さるなんて……それも必親展など、記しなすつてご
うしたのか知ら……」意外に感じながら、靜に封を披いた。

久しく御無音に相過候段お免し被下度候、御一同様御壯健之御事と奉賀上候。却
説突然ながら藤川君の義につき小生の目撃致し候こと、御参考迄に内々御通知申上
候間、篤と御熟考被遊度候、そは他儀にこれなく先般斗らず日比谷公園にて出會候
處、駭くばかり美しき令嬢と同行被致居候がその態度頗る疑はしく、決して他人と
見え申さず候に付、内々問試み候所、下宿の娘と相分り候得共、貴女の御結婚も切
迫致候今日故、頗る懸念に堪へず、必ず御油斷なきやう、特に御注意申上候、御一

覽の上は速に御火中願上候早々
書面には以上の如く記してあつた。

七

黒田鐵彦からの來書を読むだ秋子は、忽ち胸を騒がしつゝ、再度繰返して讀むだ、そうして此書面を信せずにはゐられなかつた。それには深い理由がある。黒田と秋子とは眞實の從兄同志で、殊には辯護士になるまでの學資は固より、開業する費用まで、悉く大久保家の保護を受けてゐるから、情義としても大久保家の爲に盡すのは當然であるのに、携て加へて今日まで、秋子宛に書面など送つた事は、曾てない人が、唯單に藤川の事件のみを特に注意して送つたからである。

今の今まで希望に浮立つてゐた秋子は忽ち打沈むで考へずにはゐられなかつた。

「黒田さんが、故々知らして下すつたのは、確に下宿の女との態度が怪しく感せられたからの事で、決して想像とは思へないわ……辯護士になるほどの人が、この重

大な事實を、輕卒に注意して下さる筈はないから……これが事實であつたらどうすればよいか知ら……寧ろ母様へ打明けて御相談して見やうか知ら……いや、それでは直に父様のお耳に入つて、事が面倒になつて、遂には好意上内々知らして下すつた黒田さんへ、御迷惑かけなければならぬやうに立到るかも知れないわ、だから母様にも迂濶御相談する理に行ないね、といつて那樣女がある以上、いら約束だからと申して結婚するのは尙更可厭だし、眞箇困つて了わ……しかし藤川さんだつて、那樣女がある以上、結婚なさるのは御困りなさるであらうに、どう解りなされる精神か知ら……殿方は一時の戯れに關係なさる事があるさうだから、そんな精神で交際してゐらつしやるのか知ら……それならば、厭は厭だけれども、私の結婚に故障はない理だから、成行に任せて、熟と眺めて居やうか知ら……』

「けれども、黒田さんの御書面では、驚くばかりの美人とあるほどだから、眞箇愛して居らつしやるかも知れないわ……もしさうだとすれば、私との結婚は、大學卒

業の後、御破談なさる精神ではないか知ら……いや、藤川さんに限つて、父様との契約を破つて、下宿風情の娘と結婚なさるほど、無思慮の方ではないから、萬一事實御関係があるとしても、深く心配するに及ばないであらう……しかし彼是しての中に、離れることのない筈でも出来ると大變だが、それとなく私から注意して書面を差上げやうか知ら……それも失禮だしね、吁々困つたね、どうして殿方つてかうでせうね……」

心配さうにいつたが忽ち又、

「寧ろ、それを打明けないで、お父様から、結婚期を確定して、通知して頂く事にしやう、さうしたら、その御返事によつて、略精神が計られるわ……」

決心したやうに言つた。そうして黒田からの書面を手函の底深く納めた後、母の部屋を訪ふた。

「ね、母様、私少し考へた事がありますから藤川の所へ、結婚期を豫定してお父様から書面を出して頂きたいと思ひますから、母様からお父様へ御相談なすつて下さいませんか。」

「宜ござんすとも、どうせ卒業した上は、式を擧げる約束になつてますから、お前さんに何か考へがあるのなら、大凡日を取極めて、書面を出して頂きませうよ。」

「是非どうか願ひますわ、藤川からの返書によつて、私決心しなければならぬことがあるのですから……」

「お父様が御歸邸なすつたら、早速願つて上げます。」

「屹度ですよ。」

念を推して部屋を出たが、やがて己が部屋へ入つて、黒田へむけて感謝の返書を出した。

八

黒田鐵彦は何故秋子へ向けて、藤川の品性に疵を附けるやうな、而うして秋子の心痛するやうな書面を出したのであらうかこれには非常な野心と、深い怨どが原由して

ゐるのである。元來黒田は、今日まで口にも舉動にも出したことはないけれども、中學を卒業して法政大學へ入る頃は、秋子の色香に懸想して、卒業の後は、如何にもして結婚しやうと、それが唯一の希望であつたのだけれども、彼男は大久保の保護に依つて、修學しつゝある境遇であるから、燃ゆるが如き戀愛を、じつと抑制して、中將夫妻へは勿論秋子へ對しても、そんな氣色も見せなかつた。何故かくまで抑制してゐたかといへば、萬一かゝる不謹心が中將へ知れやうものなら、嚴格な中將は、寛假せずして、忽ち學資を斷つて了うから、それが怖しさに忍でんゐたのである。なにしろ其頃はまだ、秋子の妙齡時代で女學校へ入學してゐる時でもあり、藤川などが大久保家へ出入しない頃であつたから、何でも彼でも大學を卒業して、社會上の地位を占めて、立派に獨立した後秋子にも數年來切なかりし戀を訴へて同意を求め、中將夫妻にも、抑へ抑へて今日に至つた、希望を述べて許諾を得やうと、恃み難き結婚を待みにして、左にも右にも、私立大學にしる卒業したのであつた。

しかるに一昨年の暑中休暇の時であつた、渠は在大阪なる大久保家に来て、一週日

を送つたが、其時斗らずも、秋子が在陸軍大學の藤川中尉と婚約の整つたことを耳にした、其時の渠が驚愕と失望と落膽とは想像の外で、實に非常なものであつた。一時は自暴を起して、大學を退いた上、放蕩のあらん限りを盡して、世の女といふ女を呪ひ盡して遣らうかどまで考へて見たが、しかし理智に富むた渠は、能く逸る自暴心を抑壓して、學業を廢しもせず、無事に卒業して、今日の地位を占め得たのであつた。けれども渠が秋子のために受けた。失望の負傷は、なか／＼に癒ゆべくもあらず、折も折も狙つてゐたのである。しかしながらかゝる野心があるだけ、それだけ萬事に對して細心の注意を怠らなかつた渠は、殊更に藤川とも隔意なく交際して、戀の恨なぞは毛筋ほども見せなかつた。ところが曩の日、斗らずも日比谷公園で、藤川が美しい女と共に散歩に来てゐたのを見て、忽ち嫉妬の念に堪へないのと、一つは秋子に對する戀の怨を晴さうと、遂に中傷的の書面を送つて、秋子に疑惑を起させたのである。今しも已が書齋の机の上に、來信を擴げて熟と眺め入つた渠は、快げに、

「この書面に依つて見ると、確に我輩の辭を信じたに相違ないが願くば破談にしたいものだけれど、何か好い方法はないものか知ら……」

と深く思案の迷宮に入る。

「だが假に中傷が的に當つて、破談に成るとしてからが、叔父が快く我輩に結婚を許して下れるか、これが頗る問題だ……しかし破談にさへなれば、叔父や叔母よりも、秋子に對して、否應なしに承諾させる手段を講ずるのが、何よりの捷徑だと思ふから、豊夫の際には、非常手段を實行するのだね。」

と、決心を吐くのであつた。

「しかし、秋子も美人だが、藤川と同行してゐた女は、恐く絶世の美人だ、どうして渠は艶福か知ら……萬一秋子を得ることが能なかつた節は、彼女を手に入れたいものだが、一度藤川を訪ねて見やうか知ら……高が人を下宿さすほどの家だから、公然結婚を申込むでも、拒絶するやうなことはあるまいと思ふが……」

と、戀には眼の眩み易いものか、左右に迷ひの闇路を辿るのであつた。

九

陸軍大學の卒業試験は終了した、藤川大尉は六十名の卒業生中、最優等の成績で卒業したので、長くも恩賜の軍刀を拜受する名譽を擔ふた、而うして數日の後參謀本部出仕を命ぜられた。

しかるに、意外にも激烈な腸窒扶斯に犯されて、發熱四十度を昇降して、殆んど人事不省の重患に罹つた。菊岡方の驚は非常なもので、直に醫士を迎へて、應急治療を依頼すると同時に、大阪の大久保家へ打電する、藤川の郷里へ報知する。豫て親しくしてゐた友人へ通知する。その混雜は非常なものであつた、診察の結果、醫士は速やかに赤十字社病院へ入院を勧めたが、病者が動くのを厭がつて、肯んじないために、遂に菊岡の家で、そのまゝ看病することになつた、菊岡の一家は、三年間を家族の如く親しく暮した間柄ではあり、殊には藤川が非凡な俊才で、有爲の好士官であることを知つてをるから快く引受けて療養せしむることに定めた。

ために赤十字病院へ依頼して、専門の醫士を迎へる、經驗ある看護婦を雇ひ入れる、菊岡の妻道子や、娘清子は、傳染病をも厭はず、心からなる親切を盡して必ず全快させやうと、寢食を忘れて看護するのであつた。

菊岡の家は赤坂區檜町の閑地にあつて、主人は名を徳造と呼び、東京電燈會社へ勤務して、一部の主任を命ぜられて十數年來會て欠勤したことがないといふ精勤家で、年齢は五十一である。妻の道子との間に、清子、準吉の二子を擧げて豊なといふ生活ではないが、さりとて何不自由を感じることもなく、極めて圓滿な家庭である。

眺望の佳い八疊と三疊との二階座敷が不用なので、某人からの紹介によつて、藤川龍夫を下宿させることになつて、今日に至つたのである。

藤川の床に就たのは前日の午後三時頃で、刻一刻病勢が募るために、遂に翌朝夫々電報をもつて通知を發したのであつた。しかるに、第一着に大阪なる大久保家から返電が達した。

アキコユクテアタノム

返電にはかく記してあつた、これを藤川に知らして安心させやうと思つたが、藤川はまだ發熱のために、人事を認識することが能ないので、遺憾ながらその儘枕頭に置いた。彼が友人中で、平素親く交際してゐる人は、早速見舞に來たが、何しろ激烈な腸窒扶斯であるから病室へは通さず、事情と病状とを述べて。菊岡家の人が代つて厚意を謝するのであつた。

今し會社から歸つて來た主人徳藏は、妻の道子に向つて、

「病勢はどうだね、變りは無いかな」と問ねた。

「は、何しろ熱が烈しいものですから、まだ少しもお變りが無いですよ。」

「それはお氣の毒だね、先生(醫士)は何と仰やつた!」

「此處三四日間が、最も注意を要する病勢だから、決して油斷がならないと仰やうです。」

「餘程悪性の窒扶斯だと見えるね、どうかして快くして上げたいものだと思ふが、思

ふばかりで我々ではどうすることもならないのだからね。まあ一生懸命に看護して上げるが宜い、危険期さへ越して丁へば、もう大概生命に別條はないからね。」

「その精神で介抱してゐますけれどまだ全で夢中ですからね。」

「電報の返事は来ましたか。」

「はい、大久保さんから第一に来ましたがお嬢様が御上京なさる様子ですわ。そうして手當を頼むと認めてございました。」

「お國からは、まだ来ないかね。」

「はい、まだ参らないんですよ。」

「どうか早く治して上げたいものだね。」

夫婦は他事とも覺えず心配するのであつた。

+

芝區明舟町なる黒田辯護士の宅では、藤川大尉の病氣に就いて、急遽上京した大久

保家の令嬢秋子が滞在する事になつて、二階の一室をば、客室と定めた。

事の序でに記して置くが、黒田鐵彦の宅は、事務所と住居とを兼てをるために新進の辯護士としては、分に過ぎた立派な邸宅で、初めて来た秋子は、その意外に駭いたほどである。さりながら廣い邸宅に相應しからぬ小人數で、主人の外には、書生が一人と、女中が一人をのみで至つて静寂なものである。爲に知己友人は、頻りに結婚を勧めるのであつたが、胸に野心と希望を抱く渠は、急ぐにも及ばぬと、敢て意に介する様子はなかつた。

今しも二階の一室で、密々と語ひをるは、黒田と秋子の兩人である。秋子は學習院女學部出身の才媛で、色のくつきりと白い、愛らしい顔で、年齢は二十一である。現代の女性に免れない虚榮心の強い、我任意な女であるが、しかしこの我任意といふのは、渠が所謂世間見すなものと、父の權務を恃としての我任意で、決して駕御する事のない我任意ではないのである。一言に評すれば、世間馴れない駄々娘なのである。「藤川君がそんな重患であらうとは、貴女の御宅からの電報を見るまで少しも知らな

かつたです。私も一度見舞に往うと思つてますが、何しろ事件が多くて餘暇がないものですから、まだ失敬してゐます。しかし激烈な窒扶斯といへば、傳染病下から、見舞に往つたところが、面會は許さないでせうし、許されたにしろ、逆も辭を交へる事は能なからうと思ふですね。貴女何うなさる心算で入來しつたんです。傍にゐて看護でもなさる決心なのですか。」

と黒田が問ひ試みた。

「取敢へず見舞に參つたのですけれど、様子に依つては、看護爲なければなるまいと思つてますわ。」

この辭を聞いた黒田は、如何にも駭いたやうな表情を示して、

「様子に依つては看護なさる……あの貴女が……激烈な窒扶斯の！へえ……驚きまし
たね、然うですか……。」

と呆れて顔を見詰めた。

「看護しては不可いことがあるんでせうか。」

秋子が不審さうに問ひ返した。

「可る不可いより、まあ病質を考へて御覽なさい、窒扶斯といへば九傳染病の一つで恐るべき病毒をもつてゐるのです、それも普通の窒扶斯でなく、激性の窒扶斯だといふのですから、私の考へでは、縁起の悪い事をいふやうですが、到底恢復が難かしくはないかと思ふです。そんな危険な病氣の看護をして、萬に一つも貴女へ傳染して御覽なさい、それこそ生命はないと、覺悟爲なければなりません……併し貴女の爲には生命に換へられない……大切な大尉の事ですから、身を賭して看護なさる御決心ならそれは御隨意ですけれど、私が貴女と親戚の厚誼上からいへば、先づ君子危きに近寄らずですね、舊道徳からいへば一命を抛つても、看護爲るのが婚約者の義務か知らないけれど、新しい我々の頭腦からいへば、生命在つての物種です、婚約した位に、生命懸の介抱するなどは愚劣極る事だと思ひます。」

「随分な事仰やるわね、生命に換へられないほど大切な大尉だなんて……私藤川と結婚したいなぞと少しもいつた事ないんですよ、父が見込むで、是非極るが宜いと勸

めるものですから、父の意見に従つたままですわ、ですから那樣恐ろしい病氣ならもう看護なぞ含みますわ、傳染して死んだところが、誰も歡んで下れる人ないんですもの、眞箇莫迦々々しいわ、私が看護爲ないからつて、それが爲に看護婦といふものがあるんですからね、看護婦が居れば宜ごさんすわ。』

十一

「然うです、然うです、それが爲に専門の看護婦が居るのですからね、惣か素人が不馴な看護をすると、それが爲に却つて恢復する病氣を拗らす事がありますから、餅は餅屋へ托した方が、何よりの安心です、薄情なやうですけど、假令傳染したところが、看護婦はそれが爲に報酬を受けとるのですからね。』

と黒田が煽てるやうに言つた。

「眞箇ですわね、では私見舞にだけ往つて、看護する事斷然含しますわ。』
秋子が決心したやうに言つた。

「しかしこれは私が貴女の身を思ふの餘り、注意までにお話するので、決して留める理ぢやありませんから、義理が濟まないと思はれるなら、心行くまで看護してお上げなさるが宜いです。』

「私は傳染病なぞ厭ですけど、父があゝ言ふ氣性なものですから、様子に依つては十分看護して遣れど、然う言ひ附けられて参りましたけれど、第一病院にでも入つて居るならまだしもですが菊岡の家で療養して居るのですもの、私が傍で看護する場合になると、私の食事まで厄介にならなければならぬですからね、逆も氣兼ね居られるものぢやありませんわ……だけれども、唯見舞だけで、看護爲ないで歸阪爲ましては、父がどんなに怒るか知れませんか、それに困りますわ、何か良い思案はないでせうかね。』

「然うですね……、』
と黒田は寸時考へた後、

「では恚うしては如何です、此處四五日も経過すれば、大抵海のものか山の物か、形勢

が知れるでせうから、其上で看護するならするとして、先づそれまでは日々見舞にだけ往つて、叔父様へは看護して居るやうに言つて遣つては如何です、豈夫知れる氣遣ないでせう。」

「然うです、それでは然う言ふ事に極めますわ。」漸く決意を述べた。

「然う決心が就いたなら唯今俾を命じますから、左に右御見舞に往つてらつしやい、而うして様子を見るが宜いでせう。」

「は、では一度見舞つて歸りますわ。」

秋子は早々準備して、俾に乗つて赤坂檜町の菊岡方へ往つた。かくて來意を述べるど、菊岡夫人道子は恭しく迎へて一室へ請じた。

「唯今御病室へ御案内申し上げますけれども疲れてお寝つて居らつしやいますから、ごうか取散して居ますけれど、寸時此方で御休息下さいまし。」

と茶菓など出して、待遇する。秋子は憤しやかに、

「平素至つて健康な方ですから豈夫こんな御病氣なさらうとは夢にも思つて居ないも

のですから兩親始非常に駭きまして、何の役にも立たないですけれど取敢へず私へ上京して御看護の御手傳ひするが宜いと申しますので、先刻上京致してございませうが御病氣が御病氣ですから、定めて御迷惑で居らつしやいませうに、入院もなさらず、に御厄介を掛けまして誠に相済みませんでございませう、兩親よりも厚く御禮申上げ、るやうに申附けましてございませう。」

と挨拶した。

「何う致しまして、御禮に痛み入ります行届かない者ばかりですから、思ふばかりで何の役にも立たなくて申譯がないんでございませう。しかし御存じの通り、平素至つて御壯健で居らつしやるものですから、突然ではございませう、随分駭きましてございませう、何しろ四十度以上の御發熱なものですからね、早速御醫者様を迎へましたところが、激烈な窒扶助だから早速御國許や御親戚方へ御通知するやうに仰やいましたからそれで、御知らせ申上げたのでございませう。」

十二

「腸窒扶斯と申せば傳染病ですからひよつと皆様に感染するやうな事がございますとそれこそ申譯の無い次第ですから、此方には相當設備の在る病院がございますから、御迷惑のかゝらないやうに、早速御入院なされば宜からうにと、左様申してゐたのでございますよ、尋常の病氣でも、病人なんて随分煩いものですのに、況して恐ろしい傳染病と申すのですから、眞箇御迷惑のほどお察し申し上げますわ。」

「どう致しまして、私共のやうな行届かない家でも、三年間御辛抱下さいましたのですから、失禮の申條ですけれど今日では全で家族同様お心易くして頂いてゐるものですから、こんな時こそ及ぶだけの御世話を申すのが本意ですけれど、何分にも御病氣が少し重いやうに仰やるものですから、不馴な宅で御介抱申上げるよりか、御入院なすつた方が、十分の御療養がお能なされると考へまして、御醫者様からも、私

共からもお勧め申しましたけれど、軀を動かすのが億劫だから、寸時宅で療養が爲たいと仰やいますので、行届かないとは存じましたけれど、お厭だと仰やるものを、無理にお勧めして、御病氣に障つてはならないと存じまして、熟練な看護婦を雇ひました上、少しお丈夫にお成りなさるまで、御不自由でも宅で御世話を申すが宜いと申しまして、行届かないながら、御世話申上げてゐるのでございますよ、定めて御心配遊ばしたでございませうね。」

「激烈な窒扶斯と聞きました時は、到底もう不可いであらうと存じまして、どんなに心配したか知れないんでございますよ……其後容態は如何でございませうか。」

「發病致しましてから、今日が四日目でございますけれど、心もちお快しいかと存じますが、しかしお熱は矢張四十度内外でございますのでまだ少しも油断がならないさうでございませう。」

「四十度からの發熱でございましてわね……しかし目が覺めましても、熱のために夢中でございませうね。」

「それでもいくらがお宜しい時には、此方から申上げる事がお分りなされる時もお在んなさるのですが、少し發熱が烈しくなりますと、時々讒言など仰やるんですから、眞箇お傷はしくて涙が零れますわ。」

「それほどでは、傍に参りましても、誰が見舞に來たか見分が就かないでせうね。」
 「然うとばかりも限りませんから、唯今御様子を伺つて参りますから、どうか親しく御見舞なすつて下さいまし、どんなにお歡びなされるか知れませんか。」

と會釋して立去つた、而うして寸時して再び入つて來た。

「先刻直にお目覺なすつたさうですが、昏々としてゐらッしやいますから、お分りになるか何うかは知れかねますけれどもどうか御案内申しますから、御見舞遊ばして下さいませ。」

「左様でございますか、それでは失禮致します。」

秋子は道子に案内されて、二階の病床へ通つた、見れば藤川は病床に横つて、水壺を戴いたまゝ、眼を閉ぢて、苦しうな呼吸してをる、而うして枕頭には數種の藥劑

を載せた圓盆が在つて、次の三疊の室には、一面に油紙を敷いて、消毒藥の器具や、便器や、氷の入つたバケツなどが、片隅に列べられて、消毒藥の劇しい香が、室内に浮動してゐた。

それにも増して秋子の頭腦を刺撃したのは黒の看護服を纏ふた、肥満した看護婦と相對して、駭くばかり美しい女が藤川の傍に座つて、何彼と看護の手傳ひしてゐた一事である。それは菊岡の清子である、秋子は我を忘れて眺むるのであつた。

十三

清子の美しい姿……而うして恐るべき傳染病をも厭はず、親しく看護しつゝ在る有様を目撃した秋子は、刹那の間、早くも曩の日黒田から通知を受けた、藤川と清子との關係を、思ひ浮べすにはゐられなかつた。同時に妬しくもあれば、不愉快でもあつた。寧ろ遙々見舞に來たのが、口惜しくも思はれた。

しかしそれらの惡感を熱と制へて、清子と看護婦とに向つて、

「私は、大阪から見舞に参りました、大久保秋子と申すものでございます。この度は一方ならない御看護下さいまして厚く御禮申し上げます。」

と丁寧に挨拶した。

「御挨拶で恐れ入ります。私は菊岡の娘清でございます。藤川様が突然の御病氣でございまして誠に御氣の毒に存じます。定めて御心痛遊ばしたでございませうね、山々お察し申します。遠方の所を能くぞ御上京遊しました。貴女様が御越し遊ばすことを、御聞かせ申しましたら、大層お喜びなさいまして、譚語にまで仰やつてゐらっしゃいますから、どうぞ御逢ひ遊ばして下さいまし。」清子が答へた。

「待詫びてゐらっしゃいましたから、どんなにお喜びなさるか知れないでございますよ、昨日なんか夢中に秋子さん秋子さんと、仰やつてゐたほどですからね……しかしお熱が烈しくてゐらっしゃいますから、お分りなさいますか知ら……」

看護婦がかう挨拶しながら、藤川の顔を熱と瞠めるのであつたが、やがて低い聲で、

「藤川様……藤川様……」

と呼んで見た、藤川は聲が耳に入つたのか、懶げに眼を開いた、看護婦は再び「お待兼の秋子様が御越しなさいましてございますよ。」

とや、聲に力を入れて聞かした、藤川はそれを聞くと、心ばかり首肯した。

「宜い都合にお分りなさいましたから、御辭おかけ下さいまし、一言や二言位なら、お障りございませんわ。」

と秋子へ告げた、秋子は直に恐る／＼傍へ進むで、藤川の顔を覗くやうに

「……秋子でございます、とんだことでございますね……」

有紫に女心の、現在苦しうな其顔を見ては、辭は消えて、涙含まずにはゐられなかつた。藤川は其顔を見て、満足さうに、しかも心ばかりの微笑さへ浮べた。が、それも束の間、直に眼を閉ぢて又昏々と睡るのであつた、秋子は本意無げに、靜に元の坐に着いた。

かくて三十分ばかり、病人の容態を見守つて、髪乎と控えてをつたが、やがて主婦

の道子に向ひ、

「私は及ぶだけの看護が致したいと存じまして參つたのですけれど、御見受申しますると。専門の方が附いてゐて下さいますのに、お嬢様まで御親切にしてゐて下さいますから、此上私が傍にをりましても、却つて私の身に御手敷をかけるばかりで、何のお役にも立たないやうに存じますが、如何致して宜しうございませうね。」と相談した、道子はやゝ暫時考がへた後、

「故々御看護に御上京遊ばしたのですから、御看護もなされたいでせうし、御病人もそれをお望みなさるでせうけれど唯今のところでは、御覽の通り手が足りてをりますから、斯様なことにお馴れなさらぬ、貴女のお手を煩はさなくとも、萬疎かに致さない決心でございませうから、貴女様はどうか御宿許へ御引取遊ばして、時折御見舞下さいました方が、双方御都合がお宜しくはないかと存じますけれど、如何でございませうね。」いひ了つて心の底を讀むがやう顔を眺めた。

「では、甚だ勝手でございませうけれど、お辭に従ひまして、左様致すことに致しませ

う。」

十四

秋子は遂に、藤川への見舞品、菊岡への土産品など進呈した後、芝明舟町の黒田鐵彦といふ、親戚へ滞留する旨を告げて、その日はそのまゝ黒田方へ立歸つて了つた。歸る途すがらも渠は菊岡の清子のこののみ考へるのであつた。それは黒田からの書面が先入主となつてゐるために、總て青い眼鏡で見ることでもあらうが、一つは清子の容貌が、渠以上に美しいのと恐るべき激性の傳染病をも厭はず、平氣で看護してをるのは、看護するだけの深い關係があるからだ、かう邪推したのであつた。これが疑念の源となつて、それからそれへと考へて、遂には結婚を斷つて了はうかとまで思ひ煩ふのであつた。

やがて黒田家へ歸つた渠は、失望と不愉快とを押隠して、巳が部屋と定められた、二階の一室へ入つた。そうして再び思案の人となつたのである。時は漸く黄昏れて、

室内には電燈が燦き渡つてゐた。

ところへ外から歸つて来た黒田が入つて来た。

「大層お顔色が宜しくないやうですが、神経を起したのぢやないですか。」
微笑しつゝ坐に着いて、

「どんな容態です、少しは快い方ですか。」と問ひ試みた。

「いゝえ、まだ同じ容態で、四十度内外の發熱ださうです。」

「それは困りましたね、御面會なすつたですか。」

「はア、ほんの一寸見舞だけ述べましたけれど、熱の爲に浮かされてるのですから、意識したか何うか分りませんわ。」

「それでも口は利くのでせう。」

「いゝえ、唯私の顔を見て首肯いただけでしたわ。」

「へえ、那樣に太く悪いのですかね、餘程衰弱してゐますか。」

「軀はまださほど衰弱してゐないやうですが、發熱が激しいために、非常に苦し

さうでしたわ。」

「さうでせうね、四十度からの發熱では……醫者や看護婦はどんな様子でした。」

「お醫者様は、赤十字社病院の院長様と御近所の御醫者と御二方に御診察を願つてるといふお話でしたし、看護婦も一人雇つてございましたわ。」

「それでは先づ至れり盡せりですね、ところで醫士の見込は如何です、危険なやうなことはないでせうね。」

「まだ此處兩三日の經過を見なければ、何とも診斷が就かないけれども、しかし生命には別條あるまいと仰やるさうですが、死ぬと知れてゐる病人だつて、死ぬと宣告する醫士は無いですから、そんなことは信用ならないんですわね。」

「さうですとも、それは當になつてならないやうなものです、兩三日の經過を見なければ、診斷が就かないといふほどの病狀なのですからね、しかし平素陸軍式に鍛へてある軀ですから、大概は全快するでせう、餘り心配しないが宜いのです。」
「心配しても致方がありませんから、成行に任して置きますわ。」

「ところで、貴女の看護一件は如何極めました、彌張舎すことにお極めなすつたか。」
 「はア、傳染でもすると莫迦くしいですから、看護することは含しまして、暫時東京に滞在して、日々一度宛見舞にだけ往く事に極めましたわ。」
 「薄情のやうですが、それが萬全の策です、ところで、菊岡の娘はゐなかつたですか。」

「いゝえ、ゐたどころではありません、しかも病床にゐて看護してゐましたわ、それに就いて私貴方に御相談申したいことがありますから、相談に乗つて頂戴な。」
 「相談には乗りますが、晩餐を済して、寛々聴くことに爲ませう。」

十五

晩餐を終つた黒田と秋子とは、再び二階の一室に入つて、照り輝く電燈下に相對して梅に坐つた、黒田の顔は固よりであるが、秋子の眞白い顔が黒田の勧めた葡萄酒に彩られて、仄乎と紅味を添へた風情が、艶かしく美しく見える、黒田は恍乎と其顔を

眺めながら、

「さあ、どういふ御相談でも引受けますから、遠慮なくお話しなさい。」

和と笑つて促すやうに言つた。秋子も微笑みつゝ、

「誰方も聴いてる方はないでせうね。」
 不安さうにいつた。

「ありませんとも、書生と女中の外は、この廣い屋内に、私一人ですから、安心して何なりとお話しなさい、二階へは決して上る氣遣ひ無いです、用向があれば電鈴を鳴らすやうに、さう言附けて置きましたから。」

「さうですか、眞箇お静で、遠慮な方がなくて宜ござんすわね、それでは安心してお話を致ますわ。」

熟々安心したやうに言つた、これは秋子が黒田の家へ来て、僅か半日ばかりの中に、太く感じた、眞の聲であるのだ。渠は黒田が辯護士を開業したことも知つてを、開業以來新進の辯護士としては比較的事件の多いことも略雨親の噂話に依つて、承知は

してゐたものゝ、物價の高い、生存競争の激しい東京で、設令業務上體裁を飾る必要があるとしても、これほどの邸宅に棲むでやうとは思つてゐなければ、これほど暢氣な、比較的豊かな生活をしてゐやうとも思つてゐなかつたから、實狀を見るに及んで不覺に歎ばしく安心したのである。

黒田は葉莢を緩かに喫しながら、

「さうですとも、少しも不安に思ふことはないです、至て別世界のやうなものですからね。」

「實は、まだお禮も申さないでゐましたが、先達では藤川のことについて御親切にお知らせ下さいまして、誠に有難ふ存じました、豈夫藤川に限つて、あんな不品行はあるまいと、信頼してゐたのが私の淺見でございまして、貴方の御書面を拜見致まして略承知はしてをりましたが、今日といふ今日は、成程さうだなど、適切に感じましたわ……と申しますのは、一朝感染致さうものなら、生命に關る傳染病ですからそれを職務に致してゐる看護婦は別と致しまして、普通の人なら、成だけ近寄らない

55 見 し く か

やうに、豫防するのが當然だと思ひますのに、専門の看護婦が雇入れてあるにも拘らず、平氣で傍にゐて看護するといふことは、肉身の間柄は別として、赤の他人では、餘程深い關係がなくては、成し得られない親切だと思ふのです、ですから彼の方達の中には屹度堅い約束が成立つてゐるばかりでなく、離れられない關係が生じてゐるではないかと思ふのです。第一私共と異ひまして、實に稀な美人ですもの三年の間朝夕一つ家に暮してをれば、無理からんことだと考へますわ、女性の私さへ恍乎するほどの御標致ですもの、しかしお互ひに愛し合つて、關係の生じたものは今更致方ありませんけれど、御相談致したいと申すのはそれに就いて私の採るべき決心ですがね、父は藤川に惚込むで了つてゐるのですから、無論婚約を實行させるに極つてゐますが、それを藤川が清子さんの事情を告げて破約して下れると、更に心配ありませんけれど、萬が一知らぬ顔に結婚するといはれた節には、私は愛の乾いた、不幸な結婚して、一生泣かなければならぬ悲境に沈まなければならぬのですから、どうかそれが免れたいと思ひますが、何か好い方法はないでせうかね。」

と訴へた。
 「愈よ事實とすれば、大いに決心する必要があるですね、一生の幸不幸に關する大事件ですからね。」

十六

黒田はや、暫く熟考した後、徐ろに口を開いた、

「しかし、これを解決するには、貴女の決心によつて方法が二途あると思ひます、其一途は藤川と清子との關係を奇麗に絶たした上で婚約を履行する事、今一途は、そんな手数を煩はすよりは断然破約して了う事ですが、しかし何方にしても、貴方の決心にある事ですから、根底の決意を聞かなきや御相談に乗りかねるですね、一體飽まで藤川君と結婚したい精神のですか、それとも破約する精神なんですか、それを聞かうではありませんか。」

「それは無論破約したいと思ふのです、婚約を履行するが爲に、無理に相思の中を絶

たせるといふのは、彼の方達へお氣の毒な理ですし、そんな罪な事をしてまで履行しなければならぬ必要が無のですからね、今日もお話致したやうに、元々私が好む婚約ではなくて父から勧められて決心した婚約ですから、嫌はれた人を、何でも彼でもと迫るやうな、那樣未練は少しもないのです、唯それが爲に、三年間空しく待つてゐて、婚期が遅くなつたのが、莫迦々々しいと思ふばかりです。」

「貴女の決心が飽まで破約の方にあるとすれば、お父様へ事情を告げて破約して貰へば、一も二もなく解決が着くではありませんか、他の事なら左に右貴女の爲には、一生の大問題ですからね、それとも貴女の口からお話なさる事がお厭なら、私からでも話して上げますよ。」

「けれども父にそれを話しますと、屹度確な證據があるかと、證據呼ばりをされるに相違ないと思ふです、なか／＼頑固な上に、藤川の事となれば、目が見ないほど信用してゐるのですからね。」

「だつて貴女他が秘密にしてる色戀を、證據を出せといつて、局外から何うして出せ

るものですか、いくら叔父様が軍人氣質の頑固でも、そんな事はいはれないでせう
しかし、私の考へでは、大久保家から婚約履行を迫つたら、屹度藤川の方から破約
するであらうと思ふですがね。」

「だから私御相談申すんですわ、先方から破談されるなんて、そんな侮辱を受けない
以前に、潔く此方から斷つて遣りたいと思ひますから……。」

「それならば、左に右事情を打明けてお父様へ訴へる外、他に適當な方法はないです
ね。」

「では、然ういふ事に決心致ませうかね。」
危むやうにいつた。

「貴女から言難かつたら、私からでも話して上げますよ。」

「まあ能く考へて見ますから、事に依つたらお願ひ致しますわ。」

「しかし、萬に一つも病死するやうな事があつたら、心配はないですがね、は、は、は」
と苦笑した。

「真箇ですわね。」

と秋子も冷かに笑つた。同時に、

「お、熱い、私葡萄酒を頂き過ぎて、こんなに熱して來ましたわ。」

と頬を押へた、白い指にピカリと金剛石が燦めいた。

「實に好い色ですよ、貴女ほどの美人と婚約を結びながら、藤川君も多情ですね。」
と熟々顔を見詰めた。

「あら黒田さん随分だわ、美人だなんて、今始めて逢つた人か何かのやうに、他の顔
を御覽なすつて。」

「美人を美人といふのに、少しも不思議ないぢやありませんか、なるほど今夜こんな
事をいへば、妙に聞えるか知らないですが、私が貴女を美人だと思つてるのは、今
日に始まつた事ぢやないです。中學を卒業した時からですから随分古いものです。」
と心ありげに微笑した。

十七

秋子は無邪氣に笑ひながら、

「だつて其頃私まだ十五六だわ。」

「然うです、然うです、確に十六の四月でした、私が國の中學を卒業して、大學へ入るために上京した時でしたからね、其頃叔父様はまだ參謀本部へ奉職して居らして平河町五丁目に住つて居らした時です、貴方は記憶が在るか何うか知らないですが、髪をマガレートに束ねて、海老茶袴に、矢耕の華美な羽織を着て、編上の女靴を穿いて、紫色の包を抱えて、華族女學校、唯今の學習院女子部へ往らッしやる姿が、今日でも顯々と眼前へ浮むで見えるです、吓々實に美しいね、こんな美しい人が、私の従妹に在るのか知らと、眞箇不思議に感じました。」

「まお能く記憶して居らッしやる事ね其頃の寫眞があります、眞箇然うよ……だけ

れども私を美人だなんて、嘘にも言つて下さる方は、貴方ばかりだわ……眞箇の美人で御覽なさい、藤川位に莫迦にされや爲ませんわ。」

「事の序だから話すけれども、其の時私は然う思ひました、一日も早く高等教育を受けて、立派に社會で飛躍する身分に成つたら、叔父様に願つて、是非貴方を妻に貰つて、幸福な愉快な家庭が作りた……ですから大學を卒業するまで、それを唯一の楽しみにして居たものですから、どんなに修學上張合が在つたか知れなかつたです、けれども萬が一私が目적을達するまでに、貴女の身が他へ極るやうなことはないか知らと、どんなに氣を揉むだか知れないです、ところが幸ひにも、大學を卒業するまで、何の故障もない様子ですから、やれ〜と安心して、第二の難關たる辯護士試験を、速やかに及第してそれから、希望を果さうと、勇みに勇んで貴女の宅へ往つて見れば、豈斗らん數年間戀ひ焦れて居た貴女は、既に藤川君と婚約が成立つて、藤川君が陸軍大學を卒業すると同時に、結婚式を擧げるのだと、叔母様から聞かされた時の私の失望……もう叔母様の前に居る勇氣が無くなつて、庭の松の

樹蔭に出て、男泣に泣きました。全で掌の中に握つて居た珠を奪られた心地がしたのです。ですからね、意志の弱い者ならあれで、失戀して自棄を起したかも知れないですが、私は其時百倍の勇氣を揮ひ起して、美事辯護士試験に合格した上、兩三年奮闘して多少の名聲と財産を贏ち得たら、貴女に劣らないだけの立派な妻を迎へやうと決心して誰にも言はないけれど、今日まで其覺悟をもつて奮闘して居るのです、これが私が半生間の戀物語なり、色懺悔ですが、一生告げる機會が無いと思つて居たのが、今度斗らずも悠々と語る機會を得ましたからこの機會を幸ひに苦しい思をし、た失戀談を自白したので、しかし過去つた事でもあり、他に聞かすべき話ではありませぬから、必ず貴女の胸に秘めて口外なさらんやうに頼みます。」

と物語つた。秋子は意外に感じながら靜に聽いて居たが、やがて、

「それほどに思つて居て下すつたのなら何故私に聞かして下さなくなつて！私藤川のやうな愛情の無い人と、心にもない結婚するよりか、眞から愛して下さる方なら、歎んでお受けするわ、況して貴女と私は從兄妹同志ですもの、誰も故障なぞ言ふ人

無いんですからね、」引かば靡かん糸柳の風情の籠つた挨拶した、その辭を聞いた黒田の胸は、再び秋子に對する戀が燃えて、血管に情熱の脈々と動くを覺えた。

「では、當時の私を可愛相だと思つて下さるのですか。」迫るやうに問ねた。

一八

年齢こそ二十一なれ、嚴格な家庭に育てられた秋子は、血の沸き返るやうな、優しい戀愛の話なぞ聞いた事がないのに今黒田の己に對する蜜のやうな戀物語を聞いて、生來會て覺えない懷慕さが、轟々と胸に迫るのを覺えた。同時にこれまでさほど戀しいども、慕はしいとも思はなかつた黒田が、不思議なほど慕しくなつて、顔を見られるさへ面羞くなつたけれども及ぶたけ色に見せず、

「それは無論ですわ、私の爲にそれほど苦勞なすつたのですもの、衷心から感謝爲ますわ。」

と黒田の問に答へた。

「その優しいお辭が、藤川君との婚約以前に分つてゐたら、今頃は愉快な家庭を作つて、手を取合つて歩いてゐられるでせうに、左右浮世は任意にならないものですね、もう今日では、いくら戀しても主のある花ですからね……」急に悄氣返つた、秋子は其心情を氣の毒に思ふたが、

「宜ござんすよ、私どうしても藤川の方は破約して貰ひますから……」と意味在りげにいつた。

「では、破約した後に、私の希望を容れて遣ると仰やるんですか。」熱情を湛えて問ひかけた。

「の意ですけれど、一端藤川と婚約したから、お厭なの？」と低い聲で答へた。

「何有、厭なものですか、藤川との婚約は、貴女の意志でなかつた事も承きましたし眞箇の婚約だけで、まだ貞操に汚點が附いた理ではなし、潔白の處女である事を、能く知つてゐますから、貴女さへ承諾して下されば、私は歡んで迎へます。眞箇私

の希望を容れて下さるんですか。」

「貴方さへ宜しければ、私は……」いふと等しく黒田は、堪へかねたやう秋子の手を緊と握つた。

「屹度ですよ、固く約束爲ましたよ、絶望させては厭ですよ、宜いですが。」と、一句々に念を推した。秋子の心は、意氣地なくも黒田の心に結び着けられて、もう何事も渠のいふが儘である。

「どんなお約束でも致しますけれど、父が藤川との婚約を破つて下れなければ、何うする事も出来かねますから、第一に早く歸つて、其事を相談致しますわ、事情を告げて訴へたら、無理には申さないと思ひますから……」

「しかし、私の約束は、飽まで秘して置かなければ、怪しく思はれると、お互ひの不利益ですから、藤川との解決が着いた後まで、決して口に出さないやうになさいよ。」

「は、それは必ず知らしは致しませんから、大丈夫ですわ。」

「しかしですね、餘り輕卒な事をするに折角の希望が水泡に歸するやうに成りますか、成たけ慎重の態度を取らなければなりません、それが爲に、藤川の方を嫌ふやうに思はれてはならないですからね。」

「致しますと、今寸時歸坂するのを、見へした方が宜しいでせうかね。」

「無論然うした方が宜いと思ひます、何故かなればです、藤川と清子との關係は、私からの書面に依つて、貴女の胸には上京以前から印象されてゐるから今日清子の看護してゐるのが、直にそれが爲だと知る事が能たのですけれど普通であつたなら、一度位見舞に往つて、那樣關係が知れるものぢやないですから、今日歸つて恁様々々と御話なすつても、却つて輕卒だと怒られる位なもので、藤川に心酔してゐらツしやる叔父様から、同情を得る事は出来ないと思ひます。だから五六日滞在して度々觀察した結果だといへば、叔父様の心證を動す事が能やうと思ふから然うなすつた方が宜いです。」

十九

秋子は黒田の意見に従つて、其翌日から日々一回宛藤川を見舞ふことに定めたが何時往つて見ても、清子は扮装振をも厭はず、熱心に看護してゐた、秋子の疑念は一回は一回より深くなつて、藤川に結び着られてゐた縁の糸は、すつかり解けて了つて、今はそれが黒田へ結びかけられてゐる、しかし藤川の容態はといへば、發熱が一度以上降下して、三十九度位に成つた。と同時に意識力も餘程明晰に成つて、主任醫も生命に關することはないと保證を與へるまでに成つた。

しかるに、秋子をして益々不快を感じしむるに至つたのは、秋子が上京してから四日目に見舞つた時であつた。それまでは發熱のために唯顔を見て頷く位のこと、辭などは交はさなかつたが、熱の減退と共に、意識する力も強くなれば、口もいくらか利けるやうに成つたので、秋子に向つて、

「遠方を故々御入來下さつて、誠に御氣の毒でした、もう死ぬやうなことはないと思

ひますから、安心して御歸り下さい、かうして十分な看護もして貰つてをりますし宿をお取に成つてゐて日々御見舞下さるといふは、なか／＼容易なことでないですからお志だけで澤山です。」

と断つた。これを聞いた秋子は、早くも己の見舞に来るのが、清子に對する感情上邪魔になるからだど邪推した、かうなると愈よ心ど心が離れて了つて、もう見舞に来る勇氣が失せて、賣辭に買辭の片意地が出て、

「左様なれば、両親も心配してゐますから、明日にも歸りまして、御病狀を聞かせますでございませう、どうぞ御大切に遊ばしませう。」

と別を告げて歸つたのである。かくて黒田に其話をして、愈よ翌日歸阪することに定めたのである。黒田は歡心を迎へやうと、

「如何です、今一日滞在なすつては、訴訟事件の方を何とか都合をつけて、歌舞伎座でも觀に御案内をします。」

三年目に上京したので、御供が致したうございませうけれど、何だか這度は心

に落着がなくて、安心して觀られさうにもございませんから、いづれ近い未來に安心して觀られるのを樂みに、左に右明日歸ることに致しますわ。」

「それでは、御隨意にお任せするとして叔父様や叔母様に、御土産の驗に差上げたいと思ひますから、買物旁々晚餐を御一緒に致たいですが、御附合下さらないか。」

「私も少しばかり買いたい品がございませうから、それではお供致しますわ。」

兩人は連立つて、ぶら／＼と銀座通へ向けて出た、而うして買物を整へた後、帝國ホテルへ入つて晚餐を共にして歸宅した、時は午後八時過で、初夏の夜景は渠等が前途を語るが如く、若葉青葉の香が、切々と身に迫るを覺えた。

「早く天下晴れて、かうして歩く境遇に成りたいですね。」

黒田がいつた。

「屹度今年中に成れてよ、樂しみですわね。」

と秋子が和りとした。其顔が又なく艶に見えたので、抱き締めたいほどに思ふた。

「だが、私から直接に申込むのは妙でないかと思ひますから、媒酌者を頼むたもので

せうかね。」

「それよりか、彌張直接の方が宜いと思ひますわ、元々親戚同志でもありません、私が賛成するのですもの、直に纏つてよ。」

「さう容易く成立すれば宜いですが、辯護士位と思つて、許されないかも知れないですよ。」

「其時は、私が母様に内々頼むから大丈夫ですよ。」

かゝる楽しい話を續けて、遂に臥床に就いた。が、其夜渠等は如何なる夢を結んだか翌朝は既に昨日までの人ではなかつた。

秋子は離れ難ない愛情を制へて、翌日一先大阪へ歸つたのである。

二十

秋子は恙もなく大阪の我家へ歸つた。父なる將軍は待詫びてゐた折柄とて、直に書齋へ呼入れて、藤川の病状を問ねるのであつた。

「藤川の病氣はどうかや、生命に別條は無いぢやらうな。」

「はい、上京致しました當日は、四十度以上の發熱でございまして、餘程危険状態にあつたのですけれど、昨日は三十九度に減じまして、意識力も確に成りましたし、口も少しは利けるやうに成りましたから、もう生命に別條はあるまいと存じます。」

「さうか、それは宜かつたな、先々安心した、生命に別條さへ無ければ、半歳や一ヶ年休むだつて管はない……しかしお前はどうかしてこんな早く歸つたのぢや、大丈夫になるまで、傍にをって介抱してやれば宜いのに、看護婦でも雇ひ入れてをるか。」

詰るやうに問ねた。

「看護婦は雇入れてありますが、それこれに拘らず、傍にゐて看護しやうと思つたのですけれど、八畳と三畳との二階坐敷に寝てゐるのですから、狭くもありますし、第一私の食事から厄介をかけなければならぬものですから、宿の主婦に相談したのですよ、傍にゐて看護したいと思ひますが、差支へないでせうかと申しました、

すると主婦のいひますには、看護は私共で引受けて致してをりますから御馴れなさいらない貴女の御手を煩はすまでないと存じますから、御心配遊ばさなくとも大丈夫でございます、しかしそれでも御不安でゐらつしやいますならば、寸時御滞在遊ばして、日々御見舞下さる方が宜しかと存じますと、かういふのですそのいひやうが、如何にも藤川の世話をするのが並大抵では無いのに、私までの厄介は困るというは無いばかりに聞きましたし、それでなくとも、傍に居のが厭な事情がありましたから、夫ではさう致しませうといつて、それから黒田の家に滞在して、日々見舞に上つてゐましたけれども、昨日見舞に上りました節に、私が見舞に往くのを迷惑のやうに、藤川から申されましたから、見舞に住つて厭がられるにも當らないと考へまして、早速今日歸つて参りましたわ。』

と告げた。將軍は不審の眉を顰めて疑と耳を傾けて居つたが、

『お前が傍にゐるのが、厭な事情があつたといふのは、それはどういふ事情だ傳染病ぢやから厭ぢやといふのか。』

『いゝえ、さうぢやありません、傳染病は始めから承知の上で参つたのですから、それは覺悟してゐましたけれど、藤川の傍には私があることも、私よりもまだ親切に看護する人が晝夜離れず傍にゐるのですもの、傍にゐるやうにもゐられないではありませんか。』

やゝ嫉妬らしくいつた。

『それは意外なことを聞くものぢやが、雇入れた看護婦以外に、看護する者がゐるといふのか。』

『はア、それはく美しい方がゐるのです。』

『一體それは何者ぢや。』

『下宿してゐる、菊岡の娘なんです……其方が看護してゐるものですから、私が見舞に往くのを邪魔にして、もう心配しなくとも大丈夫だから、早く歸れといふのですもの……私藤川の薄情に愛相が盡きましたから、ごうか一日も早く婚約を解いて下さい、あんな人と結婚するのは、厭でございます。』

と訴へた。

「しかし、お前のやうに早計に推断しても困る、三年間も下宿してゐた人が、大患に罹つたのぢやから、親切上娘に看護させてゐるのかも知れないぢやないか、さういふことは能くある例ぢやからな、それとも怪しむべき風説でも聞いたのか。」

有繋に思慮ある人として、かう問ねた。

二十一

秋子は將軍の辭を遮るやうに、

「風説も聞かなくてはありませんが、他の風説なんか的になりませんけれど親切盡で看護してゐるのか何うか位の事は、あの間毎日往つてゐるのですもの、いくら私が茫乎だつて、大概想像が就きますわ、早い例を考へても分るではありませんか、職業にしてゐる看護婦は別として、いくら親切盡だからと申して、他の病氣ならば知らぬこと、激烈な窒扶斯で、死ぬか活るかの苦痛を嘗めてゐるを見て居ながら、誰が命懸

の介抱するものがあるでせう、一朝感染したら一命に關るではございませんか、それも看護婦が居なければ、見るに見かねて止を得ずると言ふ事もございますけれど、熟練な看護婦が雇ひ入れて在るにも拘らず、生命を的に看護すると言ふは、普通の親切盡で能るものではあるまいと考へますわ、そのみならず、無事の時は能く連立つて、方々へ出かけるのを見かけた人もあるのですから、普通の親切盡でない事は、これらの點から考へても分るではございませんか。」

如何にも確信あるらしく言つた。

「して、藤川がお前の見舞に往くのを、迷惑のやうに言つたと言ふが、來なくとも宜いと言つたのか。」

「はい、遠方を故々御入來下さつて誠に御氣の毒でしたが、もう死ぬやうな事は無いと思ひますから、安心してお歸り下さい、憊うして十分な看護も爲て貰つて居りま

すし、宿を取つて居て、日々見舞つて下さると言ふは、なかなか容易な事ではないからお志だけで深山です。と憊う言ふ挨拶ですもの、私看護婦や菊岡の娘の前で

侮辱されたのですわ、斯うして十分な看護を受けて居ると申したのは、菊岡の娘が十分な看護をして下れるから、私なその世話にならなくても宜い、寧ろ私が日々見舞に往けば菊岡の娘の感情を悪しくすると思つて、追歸したのですわ私熟々然う思ひましたわ、これほど邪魔者にされたり、侮辱されるほどなら故々見舞に來なければ宜かつたよ……父様だつて能く考へて見て下さいまし藤川の挨拶は、一生苦樂を共に爲やうに言ふ、婚約の人が言ふべき辭でせうか、本來なれば、遙々氣遣つて來て下れたのだから、氣の毒なけれども、今暫時滞在して、これならば心配ないと言ふ所を見定めた上で、安心して、歸つて下れと言ふのが、當然の挨拶でせうそれを味も香もない、木で鼻を括つたやうな挨拶するのですもの、私腹が立つやら、残念なやらで、それではお辭に従つて歸阪致しますと言つて、直に歸つて参りましたわ、あんな薄情な人間で在るものぢやありませんわ、私熟々愛想が盡きました。」

「お前は私が藤川の人格や品性を賞めると、直に心酔してる爲ぢやと言ふけれども、決して心酔して賞める理ぢやないが、彼男に限つて、然う言ふ不謹慎な事をして、

私の面目を潰すやうな事は斷じて無いと信じとるのぢやが、お前が一圖に然う思ひ込むだ結果、疑心が暗鬼を産み出したのぢやないか知ら……何故かと言ふのに、お前と婚約させるに就いては、彼男の今日までの經歷と品性を、十分に取調べた上で、一點批點を打つべき缺點が無いために婚約させたのぢやから、何うも不可思議千萬に思ふのぢや、しかし藤川だつて、木や石ぢやないから、絶対に間違が無いとは言はれないけれども、渠は軍人には奇らしい理智に富むた男で、前途に燦めいて居る名譽の月桂冠を、自ら打捨て、了ふやうな莫迦ぢやないから、其邊から考へて見るとどうも、お前のみを信じて、早計な事は出來かねるから、目下は病中でもあるし今暫く動靜を見て、愈よそれに相違無ければ、其際探るべき途を探れば宜いぢやないか。」

二十二

「お父様には、以前の藤川が先人主に成つてますから、飽まで潔い品性の人だと、信

じ切つてゐらッしやるけれども上京後どんなに變つた人に成つてるか藤川だつて人間ですもの知れたものではないでせう……そののみならず、お父様は隔つた所から想像して仰やるけれども、私のは現在傍にやつて、目撃して申し上げるんですもの、決して疑心ではないのですけれど、お父様がそれを御承知で、時機を待てるやうなら、それはいつまでも待つてゐますけれど、しかし、私この上侮辱を受けたくないと思ひますから、藤川の方から破談を申込まないやうに、早々動靜をお確めなすつて下さいまし。』

秋子は、飽まで主張を貫徹爲やうと努むるのであつた。

『豈夫お前に不覺を取らすやうな事は爲ないから、まあ、私に委しとくが宜い。』と飲込顔に言つた。秋子の心中では、速かに破約して貰ひたいのが、山々であるけれども、父の辭に背いて、強いて迫るのは、萬事につけて不利益だと知つてゐるから、其儘口を噤むで了つた。

大久保中將は名を忠正と呼んで、日清、日露の兩戦役に勇名を輝かし、勳功に依つ

て、華族に列せられて男爵を授けられ功二級の金鵄勳章まで附與されて、遂に現在の位地に進んだ人である。實戰、謀略、共に將軍の得意とするところで、屢々參謀本部の要職を勤めた事もあれば、駐屯軍の司令長官を勤めた事もある。近くは陸軍大臣の候補に擧げられた事もあるほどで、陸軍部内では有数の手腕家であるのだ。年齢は五十四で、六尺に垂々とする長軀の上に、肉附が豊なために、風采の堂々たる事は、高位高官中稀に見るところで、加ふるに、容貌が魁偉で、針のやうな疎髯を延して、見る人をして覺えず威嚴に敬服せしむるのである。

將軍は再び重々しい口調で、

『一體藤川のをる家は、何う言家ぢや、何でも主人は會社とかへ出てをるやうに、藤川から聞いてをつたが、今も勤めてをる様子かな。』

感じた事でもあるのか、斯う問ねた。
『如何ですか、其邊の事は分りかねますけれど、何時参りましても、主人の姿は見えませんでしたから、屹度今日でも勤めてゐるのでせう。』

「何う言ふ生活をしてをるらしいか、家庭の様子は分らんぢやつたか。」

「左様ですね、委細の事は分りかねますけれど、まあ／＼中の下位な生活だと思ひますわ、さほど困つてゐるやうにもありませんし、然うかと申して、有福らしくもな

いですからね。」

「それは然うぢやらう、有福に暮してをれば、二室ばかりの二階座敷を、他に貸す理

は無いからな。して娘と言ふは幾歳位ぢや。」

「左様ですね、嬢致が美しい爲に、若くは見えますけれど、二十歳か、二十一位だと思

ひますわ、應對振なぞ、なか／＼確りしてるのですもの……」

「那樣美しい女かな。」

「感心したやうに言つた。」

「教育などの事は存じませんが、嬢致の美しい點は、恐らく廣い東京でもあれほどの嬢致は少ないと思ひますわ、眞箇品の好い美しい女ですよ。」

「ふん……然うか……」

何事か深く感じた様子が見えた。而うして寸時く思案に耽つた後、這度は快潤に、黒田の様子は何うぢやな、いつも益々盛況の一點張で泣事を言つて寄來した事がないが、何うにか遣つてる様子かな。」

と問ねた。

「お話致さうと思つてましたが、彼方ばかりには眞箇感心爲ましたわ。」

二十三

將軍は微笑して、

「どう感心したのぢや、宜くて感心したのか、悪くて感心したのか。」

「私、お父様から能くお噂は聞いてゐましたけれど、まだ開業なすつてから、一ヶ年半ばかりにより成らないのですから、定めて困つてゐらッしやるに相違無いと、蔭ながら心配して上げてゐたのでせう、ですから這度上京するに就いても、黒田の家へ往くが宜いと仰やつたけれど、實は御厄介かけるのを御氣の毒に思つてゐたので

す。ところが上京して尋ねて往つて見ると、これが眞箇鐵彦さんの住居か知らと、疑ふほど立派な屋敷ですから、案に相違して吃驚して了ひましてよ。』
勢ひ宜く語つた。

『ほう、そんな立派な家を借をつたかな私は昨年師團長會議に上京した際に是非一度来て下れといふから、隙が在つたら寄つてやらうと思ふたが、到頭多忙のために寄らずに歸つて了つたが、そんな家にをるのなら、彼の宅へ逗留すれば宜かつた喃、は、は、しかし家が立派でも、財政が苦くては、何の効も無い理ぢやが、財政はどんな様子ぢや、どうにか生活して行ける様子かな。』

『お父様でもさう御考へなさるでせう、私だつて依且さう思つてゐたのです、ところが、益々盛大と御通知なさるだけあつて想像とは雲泥の差で、室内の裝飾品だつてなかく贅澤を盡して在りますし、應接室なぞ、洋風に裝飾してありすけれど、眼の覺めるほど綺麗にしてありましてよ、而うして日常の生活振でも、私共よりか却つて贅澤な位ですわ。』

『はア、そんな生活をしてをるかな、しかし東京には、古くから開業した立派な辯護士が、幾十人となくをるのぢやから、鐵彦位な辯護士では、到底生活しては行けいから、寸時大きな辯護士の事務所へ入つて、経験を積むでから開業するが宜いと勧めたのを、成算が在るからと強情を張るものぢやから失敗を覺悟で開業させたのぢやが、有繁に強情を張るだけのことは遣りをつたと見える哩、感心な奴ぢやな。』
眞實の甥だけに、將軍の歡喜は非常なものである。

『鐵彦さんあんな方ぢやないと思つてましたが、なかくの才子ですわ。』

『さうぢや、小學校時代から、頭腦は良いやうぢやつたし、才子といふほどではないがなかく目端の利く奴ぢやつたよ、召使もをるのかな。』

『はい、書生と女中がをりますわ。』

『感心な者ぢやな、新進の辯護士でありながら、左にも右にも、それだけの事務所を維持して行くのぢやからな、一ヶ月の経費だつてなかく要るぢやらうに……。』

『一ヶ月少く積つて三百圓宛無くては、事務所の方だけが維持して行けないさうです

それに交際費其他を加へると五百圓なくては體面が保てないさうですわ。』
 「彼の腕で五百圓の収入があるぢやらうかな。』
 驚き顔にいつた。

「何でも舊藩主の法律顧問が缺員の儘に成つてゐたのを、侯爵様に直接交渉して、法律顧問にして頂いたので、其報酬が一ヶ年三千圓ださうですし、他に銀行と會社との法律顧問を引受けて、其方から五百圓宛、都合四千圓だけは確定した収入があるさうですから、眞箇安心なものですわ。』

「なか／＼甘いことをやりをつた喃、それぢや益々盛況に違ひない哩、は／＼は。』
 と満足さうに笑つた。

「だつて感心ですよ、這麼境遇に成つたのも皆な叔父様の賜物だつてさういつて歎んでゐましてよ。』

「なか／＼感心な奴ぢや喃。は／＼は。』

二十四

主治醫をして、一時危険を思はしめた藤川大尉の重患も、體質の頑健なものと、醫士の診療と、看護者の熱誠とに由つて發熱の減退と同時に、メキ／＼と恢復して四週間の後には病床を離れるまでの元氣と成つた。大尉の歡喜は無論であるが主治醫を始め、菊岡家の満足は非常なものであつた。分きて親しく寢食を忘れて看護の任に當つた、清子の欣びは一方ならぬものであつた。爲に藤川は其親切を身に泌むまで有難く思ふて、
 「あれほどの重患が、恢復したといふのは、眞箇清子さんの看護の賜物です、この大恩は藤川が生てゐる間は、決して忘却致しませんよ。』
 と衷心から感謝するのであつた、實際清子の熱心な看護には、専門の看護婦すら、呆れた程であつて、危険期と聞かされた一週間は、殆んど食事も爲なければ寢も爲せず、氷の世話から、服藥の注意、大小便の盡力に至るまで、傳染病の怖るべき事も打忘れて看護した、其看護態を見たものは、獨り秋子のみではない、醫士も附添の看護婦も、

兩者の間を疑はずにはゐられなかつた。しかも兩者の間は公明正大なもので、他の疑ふ如き關係などは、毛頭無かつた、唯單に三年間家族同様親しく暮した交誼と、陸軍大學を優等で卒業したほどの名譽者を、萬に一つも病魔の爲に亡くしてはと、この二つの理由から、一家の代表として清子を看護に従事させたのであつた。

しかるに、藤川が殆んど全快すると共に、あはれ清子は、其病毒が感染して、直に赤十字社病院へ入院する身と成つた一家の狼狽は固よりであるが、藤川の驚きは非常なもので、自ら赤十字社病院へ往つて、院長に面會した上、己の看護をして下れた爲に、かゝる病毒が感染したのであるから、特に診療を願ふ旨を乞ひ看護婦をも兩名雇ひ入れ、残る方なく手當をしたのみならず、自からも病後の疲勞を顧みず、一兩日は病床を離れなかつた。しかし清子の病症は、藤川のやうに激烈ではなかつたが、それでも發熱は三十九度を昇降してゐた。

藤川は清子の枕頭に、椅子を寄せて、やゝ熱の減じた時を待つて、

「清子さん濟ない事を爲ましたね、どうか堪忍して下さいよ……其代りには貴女の病

氣は、私が生命に替えても、必ず全快させますからね。」

と、熱情を罩めて慰藉するのであつた。清子は、涙を流して其親切を感謝するのであつた。かくして藤川は、殆んど日中は毎日病院へ来て、清子を慰め、其恢復を祈つてゐたが、幸ひにも三週間の後退院を許されて、我家へ歸つて静養する身となつた。藤川は菊岡が固辭するに拘らず、清子の入院中の費用を残らず、負擔したのみならず、清子を相州小田原の海濱へ遣つて、病後の加養させることまで盡力した、清子は勿論菊岡家では太く其厚情に感激して居た。

清子が小田原へ出發してから三日目であつた、藤川は醫士の許諾を得て、始めて參謀本部へ出勤して、參謀總長へ面會した後、

「永く病氣の爲に欠勤してをりましたが漸く全快致しましたから、本日より出勤致しました。出仕を命せられてから初めての出勤でありますから、宜しく御命令を願ひます。」

と挨拶して指揮を乞ふた。すると參謀總長は、嚴乎として犯すべからざる顔に如何

にも懐味のある微笑を見せて、

「主治醫の報告を見て、非常に心配してをつたが、全快して何よりぢや、ところで君は参謀部の出仕には爲てあるが病氣が全快したら、直に獨逸へ留學さす事に決定したるから、何れ兩三日中に辭令を渡すから、出勤爲なくとも、洋行の準備をするが宜からう。」といひ渡した。

「はい、左様なれば御命令に従ひまして準備致すでございます。」

二十五

「しかし、出發までに一ヶ月の猶豫を與へるから、其間に總ての準備を整へたり、祖先の展墓を爲たり、兩親へ告別爲て、心措なく出發するが宜い、三ヶ年間の留學に決定したるから喃。」

總長が重ねて言渡した。

「有難く存じます、委細承知致してございます。」と答へた。

「して、出發期日と乗船が決定したら、詳細に報告するが宜い、旅費は辭令を受けたら、何時でも請求するが宜い、直に渡す事に成つたるから……」

「承知致しました。」

と答へて、藤川は勇み欣んで菊岡方へ歸つた而うして、道子に向つて、

「奥様どうか、歡んで下さい、三年間獨逸へ留學する事に成りましたから、もう出勤爲なくとも宜いのです。」

と告げた。

「え、ッ、御洋行なさるのですッて！まあ何といふ御幸福でせう、ごうも御目出度う存じますね、して何時御出發なさるのでせう。」

「まだ直に出發する理ぢやないです、一ヶ月猶豫を與へられたのですから、其間に國へも歸つて來たり、總ての準備を整へなきやならないです。」

「しかし、一ヶ月位夢の間に經つて了ひはすから、なか／＼御忙しうございますね、三年の間居らッしやるのでは、御結婚も済して往らッしやらなければならぬでせ

うね。」

「何やら彼やらで、なかく忙しいですよ。」

「清子が聞きましたら、どんなに歡ぶでせう。吃度直に歸つて参りますわ、優等で御卒業なすつた節でさへ、嬉涙を溢して歡んでゐたのですもの……御洋行と聞きましたら、迎も沈としてほりませんですよ。」

「では、早速通知を出しませう。」

「は、どうか知らしてお遣り下さいまし。」

藤川は、直に書面を認めて、在小田原の清子へ宛て出した、而うして大久保家へも長文の書面を認めて出した。

果せる哉、清子は其翌日歸つて來た其元氣は非常なもので、病後の人とは思はれぬほどであつた。歸るが否や二階へ上つて、懷慕さうに藤川の傍へ寄つた。

「御手紙を有難う存じました承はれば、愈よ御洋行遊ばすんですツてね……豫ての御本望が届きまして御目出度う存じます、私嬉しくて耐らないものですから、御手

紙拜見するが否や、直に歸つて参りましたわ……」といふ目には嬉涙が見えた。「歡んで頂きたいと思つて、何處より先へ貴女へお知らせ爲たのです……しかしまだお軀が恢復してゐないのに、歸つて來たりなんかして、障るやうな事はないですか……」

「大丈夫ですよ、もう御蔭様で、こんなに快くなつたのですもの……萬一障つて死ぬやうな事があつても、貴方の爲に死ぬなら本望ですわ、先達ての御病氣の節だつて、其覺悟で御看護申上げてゐたのですもの……。」

豫てからの清子の親切に動かされてゐた藤川は、この辭を聞いて、其眞情に感動せずにはゐられなかつた。

「貴女の御親切は能く承知してゐます。能々の御親切がなければ、あの通り献身的の看護が出来るものぢやありません、けれども承知してゐながら、今日までは酬ゆる事が許されなかつたのですが、今日は漸く其時機を得ましたから、改めて貴女へ御相談致たいと思ふです、それは他の事ではないのですがどうか私と結婚して下さい」

事は能ないでせうか、腹藏なく御心中が聞かして貰いたいです。』
 『御辭は、有難く存じますけれども貴方には大久保家の御令嬢といふ、御婚約を結んだ方があつしやるではございませんか、彼方は何う遊ばしますのです？』

二十六

藤川は莊重な態度で、

『御辭の通り、如何にも大久保秋子といふ、婚約の在る女がありました、けれども彼の女は、終生苦樂を共にする人で無いと考へましたから、今日斷然破約を申込むで遣りました、何れ四五日の中には、何とか挨拶が在る事と思ひます。しかし先方から如何なる挨拶がありませうとも、私の決心は既に動すべからざるものに成つてゐますから、それがために貴女へ御相談するのです。』
 己れの決心を告げた。

『然ういふ思召でございますなれば、私は歡んでお受け致しますけれども、兩親の思惑

も在らうと存じますから、確とした御挨拶は其上に致したいと存じます。』

『それは御道理ですが、しかし唯今は貴女の御精神を承ための相談で、決して表面申上げる理ぢやありませんから、御兩親へは今暫く秘して置いて頂きたいです。貴女の御決心さへ承はつて置けば、大久保との關係が解決した上で、私から公然御兩親へお話する考へでゐるのです。』

『左様でございますか、能く了解致しました、それでは私の精神を申上げますが、私は願つても無い身の幸福ですから、有難くお受け致しますけれども、私のやうな不肖者と結婚遊ばしては、貴方が終生御不幸でゐらつしやいませうと、唯それのみが案じられますわ。』

『私は貴女に對して、それほど多くの望を抱いて結婚するのぢやないです。唯先日御看護下さつた、彼の真心さへ持つてゐて下されば、それで十分です。』

『それはもう、結婚致しました上は、一命は貴女へ捧げるのですから、何事も献身的に盡す決心でございます。』

深く答へた。

「私の望むのは、それです、其決心です。その決心さへあれば、我々軍人には十分です。では大久保家との交渉が片付次第、御兩親へ御相談爲ますから、其決心でゐて下さい。」

「委細承知致してございます。」

「しかし、念のためお話爲て置かなければならないのは、假に出發前に結婚するとしても、私は三ヶ年間欧州へ往かなければならないが、其間空聞を守つて、辛抱が能るでせうね。」

「其位な辛抱が能ないやうでは、長い一生何うして送れませう、御歸朝の日を樂にして、三年が五年でも、屹度お待申してゐまわ。」

「それを聞いて安心です。かう成ると一日も早く大久保家との解決が着けたいが、早くもまだ兩三日要るでせうね、貴女の所と同時に出したのですからね。」

「事柄が事柄ですから、種々御相談もお在んなさるでせうし、早くも兩三日経たなけ

れば、御返事が参らないでせうね。」

「早く解決して了はなければ、國許へも歸つて來なければならぬしなかく、悠々としてゐられないのですかね。」

「しかし、大久保家で御承諾なさるでせうか、私は容易に御承知なさらないと存じますかね……左に右今日まで御待なすつてゐらしたのですからね。」

「破約の理由があるのですから、那樣分らない事はいはれまいと思ふです、のみならず大久保家の格式上からいへば私等のやうな下級の者と結婚爲なくとも立派な先へ嫁かれるのですからね。」

「ですけれど、將軍が貴方をお見込なすつての御婚約なのですから、強ち然うは申されませんわ……。」

「見込まれた理でも無いんですよ……萬一交渉が暇取やうなら、國へ歸りがけに立寄つて、直接談判して解決するのです。」

「然うなすつた方が、お宜しいかも知れませんが、書面では埒が明かないでせうよ。」

二十七

午後八時頃であつた、己が書齋の電燈下で、繰捲げた書面を眺めてをるのは、大久保中將であつた、平素喜怒哀樂を色に見せない人であるのに、奇しくも眉を顰めて、何事にか懊惱する様子が見える、それも當然の事で、中將の讀むでをる書面こそ、藤川大尉から送つた、婚約破棄の通告状であるのだ、尋に餘る長文を、やがて讀了つた將軍は、覺えず嗟嘆の聲を洩らした。

「こんなことぢやらうと思ふたが、果して私の想像が的中した、惜いことを爲たものぢやな……」

諦めたやうにいつて、靜に書面を卷くのであつた、而うして寸時黙考してをつたが、やがて微に

「何うも止を得ない理ぢや……それでもと強ゆる理には往かんからな。」
獨語した後、決心したやうに、机に對して書面を認むるのであつた。

御來書正に披見致候、御希望により娘秋子と貴殿との間に取結びたる婚約は今日限り破約致候に附、左様御承知被下度、此段御返答まで如此くに候

藤川 龍夫 殿

大久保 忠正

かく認め了つて、書留郵便として差出した、而うして郁世夫人と令嬢秋子とを書齋へ呼んで、密かに語るのであつた。

「今日藤川から書面が届いたので讀んで見ると、秋子との婚約を解いて下れいといふ請求ぢやつたから、請求通り破約して遣つたから、以後關係は無くなつたから、其ことを知らせやうと思ふたのぢや。」

先づ將軍が恚ういひ渡した。秋子は勿論であるが、郁世の驚は非常なもので、驚の眼を瞪りながら、

「へえ、藤川から那樣ことを申して參りましたか、一體それは何いふ理由でございますか、何れ何と理由が在るのでございませうね。」

と問ねた。

「在る、理由は認めて在るが、それが正当な理由であるから、それで請求に應じたのぢや。」

「正当な理由と仰やいますと……秋子の身上に就いて何か氣に合はないことでもあると申すのでせうか。」

「然うぢや、秋子が妻とするの誠實が缺けてゐるから厭ぢやといふのぢや。」

「自分が清子さんと結婚が爲たいものだから、それで私に誠實が無いなどといふのですわ、随分莫迦にしてるぢやありませんかね……私屹度こんなことを言出すに相違無いと思ひましたから、東京から歸へると父様に然う申上げたではございせんか此上侮辱されるのは厭ですから、早く此方から破談して頂きたいと……それを父様が早計だとか、輕卒だとか仰やつて、御聽容れ下さらないものですから、到頭こんな侮辱を受けて了ひましたわ、何うせ彼人と結婚する精神はなかつたのですから、

破約されたのは、却つて幸ひですけれど、彼方からいひ出されない中に此方から破談にして欲かつたのですわ。」

と愚痴を溢すのであつた。

「それはお前の勝手な理窟といふもので藤川の考へとお前の考へとは全然反對しとるのぢや、藤川の書面で見ると將來苦樂を供にする筈のお前が、故々病氣を心配して上京しながら、下宿の娘すら晝夜親切に看護して下れてをるのに、唯の一日も看護して下れないといふは、誠實が缺けてをるといふのぢや、誰令病氣の爲に死ぬとしてもお前の看護を受けて死ねば、歡んで瞑目することが出来るのを、他人に任せて顧みなかつたといふのが、抑も破約を請求するに至つた原因なのぢや。」

二十八

秋子は將軍の辭を遮るやうに、

「それは藤川が、破約するについての口實といふものですわ、私お父様からいひ附つ

て参りましたから、献身的に看護する決心でゐましたけれど、下宿の主婦が如何にも、迷惑さうに断るのですもの、止むを得ないから舍したのぢやありませんか、それを今日に成つて誠實がなくて看護しなかつたやうにいふのは、藤川が當時の事情を知らないからですわ……だけれども、藤川の精神は其以前から破約しやうと決心してゐたのですから、今更何と辯解したところが、致方ありませんけれど、随分莫迦にしてゐますわ。」

腹立しさうにいつた。

「けれども、藤川は他を欺くやうな、悪心のある男ぢやないから、確にお前に誠實の缺けた點があつたに相違ないと思ふけれども、最早今日と成つては、それを争ふ必要はないが、左に右惜しい婚約を失敗したものぢや。」残念そうにいつた。

郁世夫人は秋子に同情して

「けれども貴方、秋子が看護をしなかつたのは、下宿で養生してゐたから、自分の家や病院のやうに、先方が宜いといふのを、それでも傍にゐて、看護するといふこと

は言ひかねたといふのですから、聞いて見れば無理からない所もございいますから、強ち秋子が行届かないとのみもいへないと思ひます……設令又秋子の行届かないことが在つたとしても、一度ばかりの瑕瑾をもつて、三年間も待たせた婚約を、破約して丁うといふのは餘り我任意な申條ではございませぬか、貴方は如何思召すか存じませぬけれど、破約は止を得ないとしても秋子の軀に傷を附けられたも同様ではございませぬか、良人に對する誠意が缺けてゐるなぞと、難辯を附けて破約致したのですからね、若も左様なことが世間へ知れて御覽遊ばしませ、この先結婚する節の故障になるではございませぬか……藤川と秋子とが結婚するといふことは、我々を知つてゐるほどの人は、大抵皆なが存じてゐますから、このまゝ破約して丁へば、どういふ事情で破約に成つたかとは、誰しも不審を懐くことだと存じます、ですから破談を承諾なさるに致しまして、一應はいふべき道を述べて、秋子の軀に種を残さないやうに、取計らつてやつて頂きたうございしましたね。」

「藤川ほどの男が、私に對する情義も厭はず、斷乎として破約するといふのは能々忍

ぶこののならない缺點を見出した結果に相違ないから、それで速かに承諾の旨を答へてやつたのちや、萬一これが故障となつて、結婚することが能かねるとしても、それは人間の運命といふものちやから、諦めるより致方はない。」

將軍は飽まで藤川を信する口調である、秋子は少しも頓着する氣色なく。

「看護しなかつた爲に、誠實が無いとか婦道に缺けてゐるとか申して、それが原因で破約するといふならば、私少しも厭ひませぬわ、他へ結婚したら屹度誠實を盡して見せますから……お父様は非常に藤川を信じてゐらつしやるけれども、私はあんな薄情な人は無いと信じてゐますから、寧ろ破約は幸福だと存じますけれど、藤川の方から破約されない中に、此方から破約して頂きたかつたと、そのみが残念ですわ。」

「かうなつたら藤川への意氣地でも、何處か相當な先へ、一日も早くやりたいと思ひますから、貴方も心懸けておやり下さいまし。」
郁世が訴へた。

「何も急ぐには及ばないから、悠々と良縁を捜してやるが宜い、まだ一年や二年遅れたからといふて、少しも差支へないぢやないか。」
將軍は沈着拂つて言つた。

二十九

藤川大尉は、參謀總長から内命の在つた翌々日、本部へ出頭を命ぜられて、公然三年間獨逸國へ留學を命ずる旨の辭令を受けた。而うして留學費や旅費等の支給を受けて、早速旅装の準備に掛つた。清子は藤川との内約を結んでからと言ふもの、病後の疲勞も忘れ、再び小田原へ行かうともせず、唯そはそはと浮立つて、密に笑を洩らして居つた。

ところへ大坂の大久保中將から、書留郵便が到着したが、其時は生憎藤川が不在であつたけれども、清子はその書留こそ、婚約の決定を見る、必要の書面である事を知つてをるから、幸ひ藤川の認印が机の上に在たから、代つて受取つたけれども、藤川

は、待てど待てども容易に歸らない、清子は氣を焦立つて、後には二階へ上つて、左
右の往來を眺めなどして待受けてゐた。

「例もお早く御歸りなさるのに、今日に限つて何うして這様に遅いか知ら……待たび
てゐらしつた御返書が来たのに早く歸つて御覽なされば宜いのに……」

我知らず呟くのであつた。其辭の終るか終らないのに、忽ち階段を上る音が聞えた
清子は驚いて眼を睜つた。同時に藤川の姿が顯れた。

「おやツ、貴方……何方からお歸り遊ばして、私貴方のお歸りを、此處から眺めてお
待申してゐましたのよ。」

和々して言つた、藤川も和と笑つて、

「私は一聯隊の方から歸つて来たのだが、見えなかつたですか。」

「少しも見えなかつたのですよ、何うして見えなかつたのでせうね、眺めてゐて見え
ないなんて不思議ではございませんかね。」

「屹度新町の方を眺めてゐたのでせう、それでなくて見えない道理ないですからね。」

言ひつゝ机の前に座つた。

「待たれる身に成つても待身に成るものでないと言ひますが、眞箇待身は辛いもので
すね、大久保さんから書留が参つたものですから、お早く御歸りなされば宜いと、
ごんなにお待申したか知れないんですよ。」

「然うですか、書留で！何處にあります、早く見たいですね。」
と迫むやうに言つた。

「唯今……」

言ひ棄て、下へ降りたが、やがて又書面を持つて上つて来た。藤川は不安を感じな
がら手早く披いて黙讀するのであつたが、書面は至極簡短なものであつたから、寧ろ
意外に感じたのであつた。清子は故と再び下に降りて、茶を容れて上つて来た。

「清子さん安心して下さい、大久保家との婚約は、無事に解決が着きました私の請求
に對して中將閣下の直筆をもつて、承知した旨の返書が来たです、もうこれで安心
ですから、早速御兩親へ御相談致やうと思ひますが、お差支へないでせうね。」

「ごさいませんども、屹度親共も喜んで御受け致す事と存じますけれど、しかし私へお話をなすつた事は、知らぬ顔に願ひ申したう存じます。」

「それは無論です、變な疑念を抱かれるのは厭ですからね、三年間清淨潔白な交際をしてゐて、眞に疚しい點はないですから、苟めにも疑はれたくないです。」

「それで親達が承諾致しましたら、御出發以前に結婚式を擧げる御決心でゐらっしゃいますか。」

「私は略式にしても無論結婚式を済して出發する決心ですが、貴女に何か御意見があるのですか。」

「いえ、別に意見はございませぬけれど、三年間御留學と申すのですから、若し御歸朝になつてから、結婚する事に成りますと、ひよつと又秋子さんの覆轍を履みは爲ないかと、それを心配致しましたわ……。」

「なるほど三年を氣に爲ましたね、もう這度は安心です婚約だけでは無いですからね。」

三十

大久保將軍から破約承諾の返書の到着した其夜の事であつた。菊岡家の二階で相對して語らひつゝあるは、藤川大尉と菊岡徳造の兩人であつた。

徳造は瘦肉の至極温良な性質の人で、電燈會社の中でも、模範的君子人をもつて許されてゐる。さりとして事務的才能には長たところがある爲に、一部の主任とまで登用されてゐるのである。平素は至つて寡言の方で、會社から飯つた後は、益裁弄りと、謠曲を謠ふのを、無上の樂みとして、實に缺點の少ない紳士的人物である。

「承はれば、愈よ御辭令を頂戴なすつたさうにございませぬが、實に御目出度う存じます。」と祝意を述べた。

「有難う……今日は正式に命令を受けまして、漸と安心致しました。」

「しかし、まだ御出發の日は極らないでございませうね。」

「今日郵船會社へ往つて問合して見ますが、來月の十日に歐州行の解纜するのが在り

ますから、大概はそれに乗つて赴く心算であるのです、凡そ辭命を受けてから一ヶ月以内に出發せよといふ内訓を受けてゐますから、二三日遅く成りますけれど、到底それより以前には難かしく思うのです。」

「來月の十日といひますと、まだ四週間ありますから、約一ヶ月ですけれど、三ヶ年間の御留學ですから、種々御準備もありませんし、御國へも御歸りなさるでせうしなかく御多忙でゐらっしゃいますね。」

「一ヶ月位、瞬く間ですからね、これで忙しくないやうで、なかく多忙ですよ、注文すべき品は、夫々注文しなければならず、關係の在る事柄は、一々解決爲なければならぬですからね。」

「御有理ですとも、仄に承つてをりますが御結婚も御出發以前に御舉行なさらないでせうし、御察し申します。」

「結婚といふのは、大久保家との結婚の事ですか。」

「左様承はつてをりますが、それとも私の聽違ひかも存じません。」

「大久保家との結婚談は、三年前からの婚約でして、事實であつたのですが、這回私の方から破約して丁ました。」

「え、ッ、大久保家との御婚約を御破談……そ、それは又如何の思召でございます。」

「別に深い理由はないですが、私の妻には適しない事を看破したものですからそれが爲に破約爲たのです。」

「しかし、到底御承諾なさらないでせう三年間もお待受けなすつたのでは、お嬢様がお可愛相ですからね。」

「ところが、今日破談承諾の返書が参りましたから、もう關係は絶えて了つたです。」

「へえ……もう御承諾の御返事が……それは御決斷のお早い事でございますね。」

呆れたやうにいつた。

「最も破約するに就いての、理由だけは詳細記して送りましたから、事情止を得ないと思つて承諾された事と考へます。」

「何ういふ御事情がお在りなすつたか存じませんが、家内の者から承はる所に依

「りますと、美しい立派なお嬢様ださうにございますが、御氣の毒でございますね。」
 「何有、まだ若いですから、大久保家の格式をもつて縁談を結ばれる日には、我々のやうな官職の低い者でなくとも華族であらうが、紳商であらうが、設令官吏に爲ましても立派な先へ嫁けるのですから、寧ろ令嬢のためには幸福だと思ひます。それに就きまして、是非貴方へ御願ひ申したい事がありますので、故々御面談を願つた理ですが甚だ突然ではあり直接お願ひするといふは失禮ですけれど、如何でせうお宅の清子さんを、私の妻に頂く事はならないでせうかね。」

三十一

徳造は我と我身を疑ふやうに。

「何と仰やいます、清子を妻に貰ひたいと仰やるのですか。」
 問ひ返した。

「餘り唐突な話ですから、御合點が行かないかも知れかねますが、實は這回洋行致

ますと、三ヶ年間は歸られないですが、すると歸朝の節は、もう三十を超えてをりますから、結婚するにも誠に年齢なその都合が悪いと思ひますので、望むらくは出發以前に良縁を求めて、結婚を済して、安心して出發したいと思つて、それでお願ひするので御承諾下さると、誠に幸福を得るのですが……。」
 いつもの藤川に似合はず、吃々として訴へた。

「御辭は能く解りました、不肖な娘を貰つて遣らうと仰やる御親切は、誠に有難く思ひますが、しかし御存じの通りの我任意女で、これといふ取得はありません、到底貴方のやうな、有爲な方の妻と成る資格がないと思ひますが、如何でございませう……縁談ばかりは餘り釣合が取れませんと、昔から不縁の基だと申す位ですから、行末却つて不幸を見は爲ないかと、それを杞憂するのでございます。」

「御心配はさる事ですが、實はかうして三ヶ年間御世話に預つてゐますから、私の精神も略御承知の事と考へますが、私も貴方方始め、清子さんの總てを、殆んど遺憾なく承知してをる意ですから、清子さんならばと、信する所があつて御願ひする理で

すから、行末何う彼うといふ御心配は、決して懸けない覺悟です。しかし私に見込がないから遣られないと仰やれば、これは止むを得ない次第ですから、致方ないですが願くば御承諾が得たいと思ふです。」

「それほどまでに仰やつて下さる上は、不肖ながら娘は歡んで差上げますが、大久保さんの思惑は如何でせう、誤解されるやうな事はないでせうか、御宿申してゐるだけに、それを心配致します。」

「なるほど一應御有理なお辭ですが、しかし大久保閣下は、私の人格品性は能く御承知の筈ですから、決して誤解をされるやうな事はないと思ひます、かう申すと失禮ですが、今日まで清子さんと私の間は、頗る潔白なもので、一點疚しい事はないですから、萬一誤解する人があれば、それは我々の潔白を知らないからの邪推に過ぎないので、いつか證明される時機があらうと考へますから、そこまで心配する必要はあるまいと思ひますが如何でせう。」

「いや、これも畢竟私共より、貴方の身を思ふの餘り申上げたのですから、貴方さへ

お差支へがないといふ事でしたら、決して左や右申す理ではありません、それでは早速一應當人の意中を問ねまして、御挨拶する事に致したうございますから、暫時御待を願ひます。」

と徳造は坐を立つて下へ降りた。而うして妻の道子や、娘清子に對つて、藤川からの縁談を物語つて、意見を問ねた後再び二階へ上つて來た。

「妻を始め當人の意志を問ねましたところが、當人の不肖な事を始め、不如意の境遇を御承知の上で、御貰ひ下さるのならば、願つてもない良縁と考へるから、宜しく御挨拶申上げて下れと申しますから、お辭に任せまして、縁談を取結ぶ事に致しますから左様御承知が願ひたう存じます。」

と確と挨拶した。

「早速御承諾下さつて、誠に満足致しました、就きましては、出發以前に吉辰を卜して、假の結婚式を擧げまして、披露會は歸朝後盛大に催ふしたいと思ひますが、御意見は如何でせうか。」

と問ひ試みた。

三十二

徳造は頗る満足さうな顔色をして。

「何分にも御出發の期日が切迫してをりますのに、種々の御用向がお在りなされるのですから、御意見通り結婚の固さへ濟せば、披露會などは、目出度御歸朝なすつてからの方が、何彼につけて宜いやうに考へられます。」

意見を述べた。

「然う致しますと、私は至急故國に歸りまして、親兄弟を始め、親戚の者共へもこのことを話しまして、父か兄かを、結婚式に立會させるやうに、總ての相談を取極めて上京致しますから、其上で良日を定めて式を擧げることには致たいと思ひます、甚だ勝手千萬ですが、事情を御承知のことですから、左様御承知を願ひます。」

「委細承知致してございます。」

「それから、事の序ですから、御相談致して置きたいと思ひますが、結婚後の清子さんの軀ですがね、私の國へといつても、遠方でもあり、田舎でもあるから、到底辛抱が能なからうと思ひますが、寧ろ私の歸朝するまで、此方へ預つて頂きたいですが、如何でせうか。」

「それは少しも差支へありませんから、御心配に及ばないないです。三年が五年でも歸朝なさるまでは、宅に預つて置きます。」

「どうか然ういふことに願つて置きます。」

「それでは、形式的ではありますが、古來の習慣ですから、良日を選びまして結婚の交換が致したいですが、媒酌人は如何致しませう。」

「然うですね、結婚には媒酌者も必要なら、結納も取交さなければならぬですね。」

と寸時考へた後。

「宜しうあります、媒酌人には大谷參謀總長閣下を頼むで見ませう、大抵は承諾して下さるだらうと思ひますから……あのの方が媒酌者に成つて下さると、大久保家へ

對しても、私の面目が立ちますからね。」

「参謀總長といひますと大谷大將でゐらッしやいますね。」

「然うです、然うです、大谷大將閣下です。」

「私共の娘位に、大谷大將を煩はすといふは、分に過た媒酌者ですが、御承諾下されば、こんな光榮はないですけれども……御承諾下さるでせうか。」

「私が往つて、特にお願ひ申せば、御承諾下さらないことはあるまいと思ひますから、左に右明朝御自宅の方へ伺つて、御願ひ申して見ませう、萬一閣下にお差支が在つたら、其時は止を得ませんから、大學の校長閣下に願ひます、校長閣下なら、屹度承諾下さるに極つてゐますからね。」

「何方に致しまして、堂々たるお方ばかりですから、媒酌者は、其方々にお願ひ申すと致しまして、結納は如何致しませうな。」

「媒酌者は、式に列席して貰うだけで、表面上に過ないですから、結納其他は總て我々で運んで了ひたいと考へますから、御手数ながら、良日を御撰み下さいます。」

か、然う致ますと、略儀ながら、私から差上げることに致します。」

「それも新式で宜いでせう、それでは然ういふことに御相談を極て置ませう。」

「それから御序に、結婚の日柄も吉辰を御撰定下さいませんか、私にはあゝいふことは分りかねますから……」

「承知致してございます、しかし成丈け出發間際でなければ、御都合が宜しくないでせうね。」

「なかに、國から歸つて来れば、何時だつて管ひしませんから、其邊の所は御見計ひ願ひます、國からは二十二日頃に歸つて来る豫定でをりますから……」

「それでは、其から來月の初めまでの間位で、良日を撰むことに致しませう。」

「どうか御願ひ致します。」

三十三

大久保秋子は東京から歸つた後は、黒田戀しさに堪へかねて、度々思のたけを筆に

言はせて送つた。しかし注意深い黒田は、中將夫婦に秘密の露顯を恐れて、決して返書を送らなかつたけれども、これは渠等が、別れる際に、堅く約束した上であつたら、物足りないやうに感じながらも、秋子はじつと辛抱してゐた、今日も秋子から書面が届いたので、黒田は楽しさうに読み始めた。

例もく戀しい懐慕しいの一點張で、定めて御笑ひ遊ばすでせうね、しかしこれが偽りのない告白ですから、止を得ませんわね、若し私に、小説家や詩人のやうな筆の力がありましたら、思ふ心を、より以上に申上げることが能ませうけれども生憎文章が拙ないのですから、戀しいを戀しいと露骨に申上げるより致方ありませんわ、御察し下さいね、しかし今日のは、いつもと違つて、吉報なのですから、その御意で御覽下さいませね、いづぞや御知らせ申上げた通り、藤川との婚約を、一日も早く破りたいと思ひまして、日々其ことのみ苦心して居ましたけれども、父が頑固で承知して下れないものですから止を得ず時機の到來するのを待つてをりますと、待てば海路の日和の諺に洩れませす、昨日意外にも藤川の方から、破

談を望むた書面が、父の許に参つたのです。その理由は、私が上京の節に、親しく看護しなかつたので、誠意の缺けた女だといふのださうです。可笑いではありませんかね……幸ひにも父は藤川の請求に應じて、速かに破約承知の返書を出して下れましたから、これで私は天下晴れての自由な軀に成りました。どうか安心して下さいませ、就きましては、直にと申す理には参りかねませうけれど、多少の時日を経過致しましたら、御約束の通り貴方の方から申込んで下さいませ……父は私の辭を信じて、貴方のことを信認してゐますから、案外容易く承諾することと思ひますわ、若しも左や右申しましたら、私からも母を通じて頼むことに致します、そうしたら、成功疑ひなしですわ、先ば御知らせまで、左様なら

秋子

鐵彦様 みまへに

讀み了つた黒田は、我事成れりとやう覺えず會心の笑を洩らすのであつた。「何うやら目的が遂げられさうだね……それにしても私の策略とも知らず、傳染病と

いふのに怖氣附いて、秋子が看護爲なかつたのが愉快だつた。看護さへ爲なければ藤川が必ず怒るに相違ないと思ふてをつたが、果せるかな、豫想の通り愛相盡しを爲たと見える。かうなつた上は、秋子の體はもう、私の外に何處へ遣れるものか……呶々藤川なぞも、かういふことにかけては、智惠の浅いものだなあ……」

「しかしだ、叔父はあれで軍人でこそあれ、なか／＼才智に富む方だから、下手に立廻らうものなら、諾と承知爲ないかも知れないから、この場合努めて慎重の態度を取らなければならぬ、九俣の功を一簣に損する例は能く在るのだからね……秋子に返書を出して遣りたいけれども、先々見合した方が大平無事であらう、萬一叔父に見られでもすると、これまでの苦心が書紙に歸して了うからな。」

「この儘置いては大變だ、これが唯一の證據物件だから。」と寸断々に引裂いて了つた。而うして又呟くやうに、

「急いで事は爲損する憂があるから、破約になつた上は、時機を見斗つて口を開くのだね、敢て急ぐ必要は認めないからね。」と決意を微見かした。

三十四

藤川と清子との結婚は、參謀總長大谷大將が表面の媒酌者と成つて、藤川が國へ往つて歸つた後舉行することに決定した。ために藤川は已れの故郷である、豊前の小倉へ歸つて往つた。而うして祖先の展墓をしたり、父母兄弟や親戚の人々へ、結婚のことで、留學のこと、恩賜の軍刀のことなどを物語つて盡きぬ別を惜しみつゝ、結婚式に列席するために、同伴上京することに成つた、父龍之介と共に親戚故舊を後に再び上京して、菊岡家へ到着した。

かくて、急ぎ準備を整へた後、吉辰を卜して、新橋花月樓に於て、結婚式を挙げた、其狀況が翌日の各新聞に掲載されたのみならず、新婦新郎の肖像まで挿入して在つた

ので、早くもそれを見た黒田鐵彦は、呀と呆れるまで驚いた。

「嘘から出た眞實といふことがあるが、これこそ眞箇嘘から出た眞實だ、して見ると矢張我輩の想像に違はず、疾うから戀に陥ちてゐたものに相違無い、どうも恐るべき傳染病をも恐れずに、看護してゐたといふのが、既に怪しむべきことだと思つてゐた。清子と結婚したために、秋子の方を、口實を設けて破約したものに相違ない、して見ると藤川は思慮が浅いところではない、なか／＼深謀遠慮で、到底我輩の及ぶどころではない……この新聞を見たら秋子も一驚を吃するであらうが、有繋の將軍も驚くであらう、しかし秋子と清子とを比較して見ると、身分にこそ雲泥の差があるけれども、標致といふ點になると、清子を百點とすれば、秋子は漸と六十點位のもので、比較することは出来ないから、一生の苦樂を共にする妻である以上、清子を娶るのは、敢て怪しむことではない。我輩が藤川であつても、屹度、清子を撰むからね……若し秋子の方が目的が遂げられないとしたならば是非清子をと狙を附けて置たのに、秋子の方が手に入つて、清子の方は渠に占められて了つた。とは

いふもの、清子の美しいのは例外であつて、廣い東京にも指を折るほどより無いのであるから、これは望むべくして容易に手には入らないものだが、秋子だつて、清子に較べて見劣りがするといふまでのことで、確に普通以上の美人である。慾には實際の無いものだから、彼女で満足するのだね。」

これは黒田が藤川の結婚に就いての感想であるのだ。やがて渠は新聞紙の結婚に関する記事のみを切抜いて、大久保家へ郵送したのである。

それは休憩、藤川大尉は、新婚の日浅いにも拘らず、早くも豫定の出發日と成つたので、残り惜しくも、飽かぬ愛情を後に、新橋停車場から横濱に出て、郵船會社の順風丸に乗込むで、出發するのであつた。横濱までは菊岡徳藏、清子、準吉、藤川の父龍之介、其外參謀本部出仕の親友數名が見送つた。

しかるに藤川が出發した翌日のことであつた。清子は、病後の疲勞が十分に恢復してゐなかつた折柄へ、結婚の準備で過度に神身を勞する、引續いて結婚式を擧げる。藤川の支度を手傳ふといふ状態で、眞箇神經衰弱に罹つて、とつと床に就いて了つた。

徳造夫婦の心配は非常なもので、早速良醫を招いて診療を受けたが、矢張神経衰弱の結果と診断されて、營養分を取ると共に、神経の疲勞を慰めることを努めた。ために二週間の後には漸く床を離れるまでの快方に赴いた。けれどもまだ時々昏倒することがある。ので醫士の勸告に依つて、再び小田原の海賓館へ轉療することに成つた。而うして氣隨氣儘に、濱邊を散歩したり、松並木の中を逍遙して見たり、眞箇浮世のことを忘れて療養してをつたが、しかし四六時中藤川のことを忘れる暇はなかつた。「どうか海上を無事にお着なされば宜しいがね、まだ先日在つた限り、お便りが無いか知ら……」

三十五

藤川が出發したのは六月の十日で、清子が小田原へ轉養する事になつたのは、それより半ヶ月の後であつた。轉療の効驗は空しからずして、二週間ばかりゐる中に、殆んど全快同様に快くなつたけれども、既に七月初旬と成つて、一日に暑氣が加はる

ために、寧ろ引續いて涼風の立つ頃まで、避暑をかねて養生するが宜からうといふ、両親の意見に基いて、依然滞在する事に定めた。

小田原の海賓館といふは、相模灘を一時の中に眺望し得られる、頗る景勝の旅館で三層樓の宏莊な建築で在る。冬季は暖氣で、夏季は涼氣に暑を忘れるといふので、四時都人士が遊びに来て、就中避暑避寒の頃が般賑を極めるのである。

清子の室は二階の一等西端に在る六疊の室で、比較的閑靜な、しかも風の流通する綺麗な室であつた、丁度七月の下院の某日であつた、清子は待侘てゐた良人龍夫からの書面を東京の我家から送つて下れたから、幾度か接吻した後、欣んで黙讀するのであつた。實にこの書面こそ、藤川が伯林へ到着後、始めての音信であつたのだ。

長途の海上幸ひに恙もなく到着候間、御安神可被下候。今日より準備相整へ来る月曜日より伯林陸軍大學へ入學の運と相成居候間是又御安堵被下度候。當伯林は歐洲中有名なる大都市にて、聞きしに増る盛況に御座候。これより三年間又々學生に成るかと思へば、人間は死ぬまで研究するも、研究は盡きざるやう被存候。

出立の際身體疲勞致され居候に附、其後の容態如何やと遙に心配致候。若し引續き御不快に候はば、再び小田原へ向け御轉養被成度、吳々も御勸め申候。此の書御入手の上は、直様在伯林日本大使館へ向け、御返書被下度待入申候。先は到着の通知まで、餘は次便に可申述候早々

清子 殿

龍 夫

清子は良人の無事に着いたのを欣ぶと共に同情ある優しい辭を、身に沁々と嬉しく思ふた。

「眞の武士は物の憐れを知るといふが、眞箇優しい同情の在る方ね……屹度私が苦しいいつてたものだから、病氣が再發してはと、心配してゐらッしやるのだわ……早速此方へ來てゐる事をお知らせ申す事に爲やう。」

勢ひ好くいつたが、忽ち又惰氣返つて、

「しかし、病氣に成つて轉療してゐるなぞと書いて上げたら、どんなに御心配なさるか

知れないであらうね……寧ろ秘密にしてお知らせ申さないで置かうか知ら……否々あれほど、秘密を憎むでゐらした事を承知してゐながら、隠し立てしては、後日知れた節にどんなに、不親切だと叱られるかも知れない、矢張斯様々々で轉療に來てゐるけれども、もう全快したから安心して下さいと、明地にお知らせ申す事に致やう」と早速返書を認めて差出した。而うして再び藤川の書面を繰返して讀んだ後、疲勞を覺えたのであらう、書面を緊と胸の上に抱締めて睡に就いて了つた。時は午後三時頃で、海面を撫で、吹き送る風は、室内に流れ込むで、轉寢の夢は圓に結ばれるのであつた、かくて夢路を深く辿つた後、不斗眼を開いて見ると懐中時計はまだ四時少し前であつたので、再び安心して夢路に入つたが、やゝ暫時睡つた頃、

「清子さん。」

と力のある聲で呼んだのが耳へ入つた。吃驚して眼を覺して見ると、人の姿はなく

て聲を限りに鳴く蟬の聲が、ツイ庭先の梧桐の梢から湧くのが聞えた。

「確かに呼起されたやうに思つたのに、矢張夢であつたのかね。」

聲の響を慕ふやうに言つた。

三十六

黄昏近い頃、書寝の夢から覺めた清子は、直に海水沿に入つて、浴衣のまゝ二階の廊下に出て、欄干近く立つて、遙の沖を見渡した、夕焦雲の映つた海上は、火の如く紅く輝いて、其上を星かと紛ふ舷燈を點じた船が、早くもちら／＼と美しく認められる。

「いつ見ても宜い氣地なこと、眞箇海の夕景色を見ると、氣が清々するわ、而うして入浴した此軀の氣地好きは、何とも言へないわ……」

恍惚として餘念が無い、折しも突然空室だとのみ思つてゐた隣室から、浴衣のまゝ、ヌツと姿を廊下に顯した人がある、清子はハツと驚きつゝ其人を見た。其人も清子を見て其人は和りと笑みつゝ、

「をやッ、貴方は何時日比谷公園でお目に懸りました、菊岡さんのお嬢様ではあらッ

しませんか。」

と馴々しく辭をかけた、清子は意外に感じながらも、其顔を熟と眺めると、それは見覚えのある黒田鐵彦であつた。黒田を大久保將軍の甥と知つてゐる清子は汗々とした人に出會つたと思ふたが、殊更に笑顔を作つて、

「確か、躑躅の頃でございましたわね。」

「然うです、然うです、躑躅の盛りに、岡の上で藤川君と御一緒に……」

「左様でございましたわね、ツイお見逸申して失禮致しましたわ……此方へは何時お越し遊してございます。」

「今日……それも先刻参つたばかりです、貴方は疾うからお越しですか。」

「はい、私はもう彼是三週間ばかり滞在してゐますのです。」

「左様ですか、皆様御同伴でゐらしツやいますか。」

「いゝえ、私一人でございます。」

「それはお淋しくおらッしやいませう、私も一ヶ月ばかり、初中終といふ理には参り

かねますけれど、避暑を兼ねて海水浴に参りましたから、どうかお心安くお願ひ申します、失禮ですが、室は何番でござらっしゃいますか。」

「あの、此室が私の室なのでございますよ。」指差した。

「左様ですか、それは不思議ですね、私の室はお隣に定まつたのです、能々御縁が在つたと見えます、どうかお心置なくお遊びにのらして下さいまし。」

「有難ふ存じます。」

「過日藤川君が出發した節に、新橋まで見送りましたけれど、雑踏中でしたから、ツイ、御挨拶も致しませんでした、無事に着いたと見えまして一昨日通知して下れました。定めて詳しい書面が参つたでせうね。」

「はい、漸く今日東京から送つて下れまして、委細承知致してございます。」

「伯林は大層盛大な都市だそうですね、藤川君も意外の感に打たれた様子で豫想の外だと感嘆して寄來しました、何しろ世界有名な大都會ですからね。」

「左様ださうにございますね、私共には想像も就かないのですよ。」

「それは御同様です、私なども彼國の繪や、寫真に依つて見た位なものですから、想像は就きかねますが、何から何まで規模が大きいのですから、到底東京と比較にはならないと思ひます。は、は、は。」

「ところへ館婢が夕食の膳を運んで來て

「御都合で召上り下さいまし。」

と清子にいつた。

「では直に頂きますわ。」

と黒田へ會釋して室へ入つた、黒田も直に室へ入つた、而うして渠は、他知れぬ微笑を泛べて、

「真箇意外だ、これが所謂結ぶの神の紹介せといふものだらう、好機逸すべからずとは、かゝる場合に用ふる辭かも知れないで……。」

と心中に歎んだ。

三十七

清子は黒田に出會つた時、藤川と大久保家との關係上から、屹度悪感を抱いてゐるに相違ないと思ふた、それが爲に何となく仇の片割にでも出會つた心がして覺えず胸が騒立つた。けれども馴々しく辭を懸けられて、辭を交へてゐる中に、それが漸次消えて来て、いつしか仇のやうに怖ろしかつた心が失くなつて了つたそれは黒田に親く交際したことがなかつた爲でもあらうが、一つは黒田が如才なく交際するため、深い心の清子は早くも已の僻見であつたと考へた。けれども今日は名譽ある軍人の妻であることを自覺してをるから、苟めにも世の疑を受ける如きことをしてはなららざと、飽くまで注意を拂つて、寒梅の霜雪に屈せぬ嚴格を保つてゐた、爲に黒田も無遠慮に訪れる度毎に、心の中では言知れぬ苦痛を感じるのであつた。然るに、黒田の清子に對する態度は、極て圓轉滑脱なるもので見懸に依らない好紳士だと感せしめた。二週日はかりは、讀書などしてさして無聊を覺えずに日を送つて、八月中旬と成つ

た。某夜のことであつた、黒田は所用のために東京へ歸つてゐたのが、僅か一日經て再び遣つて来て、清子へは好だと聞いた、風月堂の栗饅頭を土産に買つて来て與へたのみならず、ベルモットや、白葡萄酒など携へて来たといつて、清子の室へ携へて往つて、強ひて勧めるのであつた、清子がかゝる状態を他に見られてはと、非常に氣を揉むのであつたが歸つて下れともいひかねて、止むを得ず。

「私、兩三日御越しなさらぬやうに承はつてゐましたから、まだ今日ではないと存じてゐましたのに、大層お早くてゐらツしやいましたわね。」

「少し辨じなきやならない用向があつたものですから、それが爲に歸京つたのですが、生憎相手が避暑に往つて不在でしたし、それに東京の熱といつたらお話にならない熱で、百度から百二三度ですもの、到底辛抱も我慢も能るものぢやないですか、早速又遣て参りました。」

「まあ、本年はそんなに嚴しうございますかね……して見ると、暑いと申しまして、此方は餘程涼しうございますわね。」

「全然比較になるものぢやありません、熱乎と坐つてゐても、自然に汗が流れて出るんですからね。」

「それでは、なか／＼まだ歸京りましても凌がれないでございますね。」

「本年は九月の下旬にならなかつたら、涼しくならないでせう、例年よりは餘程烈しいですからね。」

かゝる話の中に、黒田はウキスキーを飲み、清子にはベルモットを勧めて無理に飲ました。が不思議にもやゝ暫時経つと、頻りに睡氣を催ふして、坐にも堪へなくなつたから、

「誠に失禮ですけれど、私ッイ頂き過しまして、大層苦しくなりましたから、これで御免しを願ひます。」

と、挨拶さへも勿々に其場へ倒れて了つた。黒田は其姿を見て、密に物凄いな笑を洩らしながら己の室へ去つた。

「おゝ苦しい、どうしてこんなに睡くなつたのか知ら……」

言ふ中に、堪へられなくなつたので、直に臥床の中へ倒れるやうに入つて了つた。が、五分と経たない間に、生體なく寝入つて了つた、夜は森々と更けて、先刻まで何れかの室で、話聲が聞こえてをたがそれも消えて、廣い館内が死んだ如く静り返つた。もう十二時を過ぎて、一時に近い頃であらう……黒田は拔足差足して、間の襖間近く忍び寄つた。而うして清子の様子、如何にと窺ふのであつた。が、室内は寂々として、呼吸の音すら聞えない。黒田は尙も耳を聳立て、聞いてをたが、音せぬやう密に間の襖を細目に掛けた。かくして又凝乎と窺つてゐたが、やがて決心したやう、室内に忍び入つた。渠は何が爲に、かゝる怪しい行動をするのであらう？

三十八

清子が睡魔から覺めたのは、殆んど一時間の後であつた。見れば確に燈してあつたと思ふ電燈が消えて、室内は暗であつた、不思議に感じながら、起上つて點電しやうと思つたが、軀に千斤の重味が結び着けられたやうに、動くことすら懶い。

「どうしてこんなに疲れたか知ら……」
 思ふと同時にベルモットに酔ふて、苦しさに堪へ兼ねて、臥床に入つたことが淡い夢のやうに思ひ出された。

「では、お酒に酔つて、それがために疲勞したのか知ら……いくら御酒に酔つても、こんなに大患後か何かのやうに疲勞する筈はないと思ふがね。」
 暫時は床の上に横はつたまゝ、熟と考へてゐたが、餘りの不思議さに、勇氣を鼓して、ふらつく軀を少かに立つて、勝手知つたる電燈を點じた、同時に渠は、軀に異常のあることを知つた、瞬間に水を浴びた如く、肌に粟を生ずるまで、或一種の恐怖を感じた、爲に寸時は、無言のまゝ何事か考へてゐたが、やがて密と黒田の室を窺ふたすると黒田はウキスキーに酔ふたのか、それとも他に疲勞すべき原因があつたのか、いとも心地快げに前後正體なく睡つてゐる。これを見た清子は、再び床の上に坐つて有合ふ冷茶に渴した咽を濕しつゝ、暫時目を閉ぢて、熟と精神の沈靜を計つてをつたが、何事か決心したやう、やがて再び黒田の寢息を窺ふた後、疑ひもなく熟睡してを

るのを見極めて、密に室内へ忍び入つた。而うして床の間に列べてある、ベルモットの瓶から、茶碗へ半分ばかり注ぎ取つて、素早く又電燈を消して置いて、己が室に歸つた。が、黒田は全く熟睡してゐたものと見えて、少しも知らなかつた。清子は盗み取つたベルモットを錠の下りる戸棚の中へ納めた後、圍へ往つて、やがて室へ歸つて、再び臥床へ入つた。けれどもなかく、に睡らるればこそ、口惜しさど、不安とに、胸のみ時ならぬ波動を起して、種々の迷想に耽けるのであつた。

「黒田といふ人は、立派な紳士とばかり安心して交際してゐたのに、何といふ怖ろしい、大膽な大悪人であらう……ベルモットもこれまで頂いたけれどもあんなに少量頂いてこれほどに、酩酊したことはないから、屹度あの酒の中には、恐ろしい魔睡劑が混せてあつたに相違ない……それでなくてはあれほど正體を失ふ理がない……而うして確に點してあつた電燈も消してある、軀に異状を感じてゐた、それこれを考へると、魔睡として置いて、屹度忍ぶことの能ない汚辱を與へられたに相違ない……どう考へてもそれとより思へない……呶々若しさうであつたとしたら、私の身は

どうしたら宜いか知ら……いくら知らない中に犯された災難とはいひながら、今日
は名譽ある藤川が妻である、愈よそれと知れた以上は、潔く自殺して了はうか知ら
……噫々果して相違無かつた場合は、どう考へても、藤川に會はずべき顔がない……
……左に右明朝は早々醫士の許へ往つて、内々分析を願つて見やう、その結果愈よ魔
睡劑が含まれてゐると知れた曉は、早速東京へ歸つて、兩親へ相談して、其指圖
を受けて解決することに致やう。』

かう考へて、遂にまんじりともせず、夜を明かして了つたが、如何に我慢して起上
らうと思つても、軀が怠くて、起上る勇氣が出ないために其儘又横に成つてゐる中
に、疲勞してゐたと見えて、こんどは心にもなく、そろ／＼と睡つて了つた。かく
て再び目の覺めた時は、旭が高く昇つて、室の障子に眩きばかり光を投てをつた。
清子は漸く我慢して起上つた、而うして黒田はと様子を見ると、何れへ出かけたか
室にはゐなかつた。ベルモットの瓶も無くなつてゐた。思ふに何れへか持出してし
つたのであらう……

三十九

清子は朝飯も食へずに、俵を命じて小田原病院へ、彼のベルモットを携へて往つた
而して、院長に面會して、己れの軀を診察して貰うと共に、ベルモットの分析を依
頼した。院長は仔細に診察した結果、確に何物にか中毒したのだと診断した。かく
て又ベルモットを藥劑師に命じて分析させたが、分析の結果多量のコロロフォルム
が混入してあつたことを告げた、清子は今更のやう愕きながら

「其コロロフォルムと申すお薬は、有害な藥劑でございませうか。」と問ねた

「有害なところではありません、我々の方では、有機化合物の溶解劑に用ひたり、外
科手術の麻酔劑に使用しますが無色揮發性の藥劑であつて、多少甘味があるために
ベルモットのやうな甘美な酒に混入した時は、混入してあるか否やが分らない位の
ものです、爲に歐米では麻酔劑に用ひられて、悪漢の悪用することが屢々あるで
す、貴女がお持になつたベルモットは容器が、茶碗であつた爲に、コロロフォルム

は、殆んど揮發して了つてゐたさうですが随分多量に混入してあつたことが知り得られるさうです。」

と院長が説明した、清子は今更身顛ひして、

「左様でございませうか、そう致しますと酒氣に混入して飲ませましたら、痲醉させることが能ますのですね。」

「能きますとも、十分に痲醉させられます。」

この辭を聞いた清子は、扱はと愈よ黒田の行爲を憎むのであつた。

翻つて黒田鐵彦は、早朝から何れへ往つたかといふに、渠は曾て初めて清子を見た時から、其容色を見て、呶々世には美しい女もあるものだ、熟々感じたのであつた。けれども今日まで親く物語る機會がなかつたのみならず、清子と藤川とが結婚したのを知るに至つては、羨みながらも殆んど、渠に對する戀は斷念してをつたのである、それが偶然にも小田原の旅館で、しかも隣室に滯泊することになつたら、又も渠が清子に對する情慾は、以前に増して激調と成つた。けれども今日の清

子は既に藤川夫人であることを知つて居る渠は有繋に品性を疑はれるやうな、淫猥な話などは、絶対に避けて、唯四方八方の話を、諧謔を交へて愉快に語るものであつた、清子は黒田にかゝる野心の在ることなどは、夢にも知らないから、始めこそ大久保家に對する關係上、多少警戒を加へてをつたけれども後には、快濶な青年紳士として、寧ろ心を許して交際するに至つた。しかしこれは黒田の慣用手段であつて、この間に渠が情慾は炬の如く燃えて、遂に大膽にも、非常手段に訴へて、野獸的戀の希望を達したのである。が、己が法律家であるだけ、事の露見を恐れることは非常なもので、夜の明けるを待つて、彼のベルモットの瓶を密に持出して濱邊へ往つた、而うして、海中へ残りの酒を捨てた後、空瓶は海中に突出した、岩を目覓けて投附けた。かくして海濱を逍遙して旅館へ歸つた、けれども居るべき筈の清子の姿が見えないので、不安の餘り館婢を呼んで問ねるのであつた。

「お隣室のお客様お出かけになつたのか。」

「はい、少しお加減がお悪いと仰やいまして病院へお越しでございませう。」

この辭を聞いた黒田は、ハツと良心の苛責に苦しめられた。

「病院へ……へえ、何處がお悪いのか知ら……昨晚まで那樣御様子はなかつたがね。」
 とはいつたが、診察の結果、事が露顯するやうな事はあるまいかと、胸の中は容易
 ならない苦悶を感ずるのであつた。

「詳しい事は存じませんが、お軀が大層疲勞したとか仰やつてゐらつしやいまし
 てございます。」

「然うかね、それは意外事だつた……やア有難う、有難う。」

「どう致しまして。」

女中は去つた、黒田は尙も苦悶するのであつた。

四十

「今にも清子さんが歸つて來たら、何と挨拶爲やうか知ら……知らない顔をして、病
 氣の見舞を述べたものか、それとも病氣の事なぞ全然知らない顔をして、例のやう

に訪ねたものか知ら……それで萬一診察の結果、事が露顯に及んだら何う爲やう、

豈夫我輩が罪惡を犯したとは思はないであらけれどね……」

黒田は熟と考へ込むのである、やがて決心したやう、

「大丈夫とは思ふけれど、萬一我輩の所爲と知つた態度が見えたら、其時は寧ろ窮鼠
 と成つて猫を食むのだね。」

冷かに笑を洩らしたところへ、衣摺の音も淑かに廊下傳ひに清子が歸つて來た。さ
 すがの黒田も悸乎として、暫時は様子を眺がめてをつた、清子は衣類を着替えなどし
 てゐたが、やがて團扇に風を呼びながら、如何にも疲かれたやうに靜かに横に成つた
 其處へ女中が上つて來て、

「奥様、御飯を召上りませんですか。」

と問ねた。

「何だか頂きたくありませんから、お晝に頂きますわ。」

「左様でございますか、御加減は如何でございます、お太くお悪くはないんでござい

「まさか。」

「もう大きに快くなりましたわ。」

「どうぞ御大切に遊ばせ。」

と立去つた。しかし今日の清子の顔は非常に色が沈むで、決して昨日までの色艶はなかつた。それも當然の事で、渠は太く身の不謹慎で在つた事を悔みて、一方ならぬ苦悶を感じるのであつた。

「いくら龍夫さんの知己にしても、獨身の方へ交際したのは私の不謹慎であつた。そればかりでなく、夜更けて御酒を頂くなんて、良人在る若い女の、必ずなすべき所爲ではなかつた。爲すべき事でないのを、忘れて爲たといふのは、第一は私の不謹慎であつた。肝々泣にも泣かれず、死ぬにも死なれぬ苦みを見るのは、私の不調法から起つた事、半は私に罪があるのだわ。」

かう考へながら、前途の處置に思ひ及ぼして、左や右と思案に沈むでをつたが心配の餘り、遂に疲れて昏々と睡つた。黒田は様子如何にと注意してをつたが、睡つた様

子を見て、少しく安心して、己も新聞を眺めつゝ、轉寢をして了つた。かくして清子が目を覺したのは、正午を少しく過つた頃であつた。やがて冷水で顔を洗つて、やゝ精神の爽快を覺えたので食事を済して、再び黒田に對する善後策を考へてゐると、突然黒田が例の態度で入つて來た。

「どうも昨夜は失禮でした。承れば御不快で病院へ往らしたさうですが、如何なさいました、御加減が宜しくないますか。」

白々しく問ねた。清子は黒田の顔を見ると、室を逃出したい程に思ふたが、突然入つて來られた爲に、止を得ず恐怖しつゝも辭を交へない理に行かなかつた。

「いえ、別段何處が悪いと、取留めて申上げるほどの病氣ではございませんけれど、少し頭が重かつたものですから、熱に當てられたのではないかと知らず、診察して頂きますしてございます。」

「それは御困りですね、もうお宜しいのですか。」

「はい、もう大きに宜しうございます。」

「ひよつと昨夜の御酒のためではないか知らと、ごんなに心配したか知れないです。」
 と、清子の心を讀むやうに顔を見た。その辭を聞いた清子は、忽ち怨めしさうに黒田の顔を見た、其視線がびつたりと合つたので、極り悪しげに俯向きながら、
 「頂きつけない御酒を頂いたものですから、彌張それこれで、軀の調子が狂つたのださうでございます。」と意味在りげにいつた。

四十一

黒田は氣の毒氣な顔をして、

「それは何とも申譯の致しやうがないですね、暑中ですから、それが爲に障つたのでせうかね。」

飽まで知らぬ顔にいつた。清子は此人がかゝる汚辱を加へたのかと、怖ろしくもなり、怨めしくもあるので、熱と瞋めてゐた。

「ベルモットは、これまで暑中にも頂きましたけれども、少しも軀に障つた事はなか

つたのですけれど、何ういふ加減かと思議に存じますわ。」

愧よといはぬばかりに言つた、黒田は戀の望を遂げた爲に、慕はしさが一人募つて、憧憬するがやう瞋めてゐた。

「同じ御酒を飲むでも、軀の調子と、其場合に依つて、悪酔をする事は能く在るのですから、時が悪かつたかも知れないです、何に致しましても、無理にお勧めして、お軀に障つたとすれば、私の失策ですから、平にお詫致します、どうか御免しを願ひます。」

と謝罪するのであつた。清子は其罪を隠すのが、如何にも腹立たしいので、思ひ切つて、面責爲やうかとも思つたが、輕卒にいひ出して、却つて敵に乗せられてはと、少に我慢した。

「屹度頂く時機が宜くなかつたのだと存じます、もうこれに懲りまして、御酒は斷じて頂きませんでございます。」

飽くまで罪を酒に歸した。

「太く懲りさせまして、眞箇申譯がありません、しかし悪意在つてお勧め申したのではなく、好意で差上げたのですから、お怨み下さらないやうに願ひます。」

と、遠廻しに、或意味を仄見かした。すると清子は何を感じたか、

「私、明日一時歸京致さうと存じますから、今日限りお目に懸れないと存じます、永々御厄かけまして、相済みませんでございませう。」

「おやッ大層急に御歸京なさるのですね、何か御都合でもお在りなさるのでございませうか。」

「はい、急に歸らなければならぬ用向が出来致したのでございませう。」

「然うですか、それは残念千萬ですね、しかし又入來しやるには入來しやるでせうね。」

「参りたいとは存じてゐますけれど、判然と分りかねるのでございませう。」

「しかし、東京へお歸りなすつても、暑が烈しくて、なか／＼辛抱がお出来なさらないでせう、實に烈しいですからね、御都合がお就きでしたら、成たけ入來しやいませお待申しております。」

かゝる談話に時を移して、やがて黒田は己が室へ歸つた。而うして清子のいつた辭の節々に就いて、其心中を付度するのであつた。

「あの辭の様子では、どうやら我輩の秘密を勘附いてゐるらしいが、しかし豈夫に汚辱された事は知らないであらうね……それとも軀の異状で知れたのか知ら……寧ろ知つて下れる方が、此方は都合が宜いけれども、豈夫にそんな慘酷な事を爲るとは思はないであらう……だが今日限り歸つて了うとするともう再會は期されないかも知れないから、何とかして合意上戀が遂げたいものだね。」

と、飽くまで情火を燃やすのであつた。

清子は清子で、忌々しさうに燃ゆる怨を獨語つのであつた。

「何處まで他を莫迦にするのか知ら……知らないと思つて、あんな空々しい事を言つてゐるのかね……寧ろ一々證據を指摘して面責して遣れば宜かつたね……いや／＼言ふべき事は何時でも言へるものだから、まあ／＼この儘知らぬ顔に過た方が、何彼につけて利益かも知れないわ。」

と、少に胸を刺へるのであつた。

四十二

夜の八時頃であつた。黒田は例のウキスキーの酔を假りて、清子を其室に訪ふた。

「愈よ今夜限りお別れ申さなければならぬと聞きまして、如何にもお名残り惜しく思ひますが、名月を幸ひに、濱邊でも御一緒に散歩致したいと思ひますから御附合ひ下さいませんか。」

と、誘ふのであつた。これまでならば快く共に散歩するのであるが、今日の黒田とは共に歩くさへ厭はしく思ふので、

「有難う存じますけれど、まだ軀が疲勞してゐますから、例のやうに歩みかねると存じますから、今夜は失禮致します。」と辭退した。

「例のやうに、お早くお歩きなさらなくとも、緩々で宜しいです、實は少しお話し申

したいことがあるのですけれど他聞を憚りますので、散歩ながら聴いて頂きたいと思ふのです、どうか今夜限りのお別れですから、枉げて御附合下さいませんか。」と仔細ありげにいつた。清子はこの辭を聞くに等しく、事に依ると、罪の懺悔をするのではないかと、瞬間頭脳に閃いたので、寸時考へた後、

「左様でございますか、何か特にお話でもございますならば、お供致すには致しますけれど、しかしまだ疲勞致してをりますから、徐々でなくては歩みかねますが、御迷惑ではございませんか。」

「どうせ散歩ですから、いくら悠々とお歩きなすつても、少しも差支へないのです。」
「では、寸時お供致します。」

と直に浴衣着のまゝ、共に旅館を出て濱邊へと歩むのであつた。

「實に好い月ではありませんか、月は秋に限るやうにいひますけれど、春の月、夏の月、共に其時季の風景と調和してなかく風情のあるものですね。」

黒田が牙え渡る月光を望むで言つた。

「しかし、いくら圓の月が照りやえてをりましても、観る人の境遇に依りまして、月に對する感想が異なりますから、私のやうな、胸に煩悶の在るものは、こんな好い月を眺めましても、楽しいよりは、なかくに哀う存じますわ。」

「太く悲觀なさいますね、伯林が思ひ出されたと見えますね……しかし御辭の通り月に對しても花に對しても、人に依つて皆な感想が異なりますね、古歌の所謂、月見れば千々に物こそ愁しけれ我身一つの秋にはあらねどです、けれども、貴女のやうな幸福な方が、何うして悲觀なさるでせう、實に不可思議ですね。」

「幸福な身でも、丁度月に群雲の災があるやうに、悪魔が在つて、幸福を棄して了へば遂には不幸に泣かなくてはならないでせう、ですから他様から御覽になつて、幸福に見える、境遇でも随分不幸な人も世にはあるのですよ。」

「常擦りをいふ。かゝる話の中に早くも海濱へ出た、都會から避暑に來た人が彼方に一人、此方に一人、涼を食つてゐるのが、月の光に透して見える、二人はやがて磯馴松の在る天狗岩の前に着いた。」

「黒田さん、貴方先刻何かお話があるやうに仰やいましたか、どういふお話でございませうお話し下さいませんか。」

と、清子が促すやうに問ねた。實は清子はこの話を聞きたい爲に、疲勞を厭はず同行を諾したのである。

「お話致しますが、歩きながらには到底盡きまいと考へますから、寸時く岩に腰をお掛け下さいませんか。」

と己れ先づ腰を下した、續いて相對して清子も腰を掛けた。

月は相摸灘一面に照りやえて、戦との風もなく、海上は眠つた如く平和である。只静心なく緩く岩根を洗ふ小波のみ、ざはくと響くのが夢のやうに聞えた。

四十三

黒田と清子とが腰を掛けた天狗岩は、其往昔天狗が羽を休めたといふ俗説が傳へら

れてゐる、有名な岩だけに、濱邊に遊びに来る人は、大抵この岩に腰を掛けて憩ふのが常である。高さ一丈五六尺ある大きな岩で、周囲は十七八間もある。所々に腰を掛けるのに相應しい平扁な所が、幾ヶ所もあつて、誰彼を問はず休息の椅子代に當てるのである。黒田等は己等二人とのみ安心して腰を掛けたのであるが、二間ばかり隔つた場所には先の程から腰を掛けて、石に枕しつゝ、晃々と輝き渡る月を眺めてをる一人の男があつた。とも知らずに話を始めた。

「奥様、お話しはいふは他の事ではありません、私は貴女に懺悔しなければならぬことがあるのです、懺悔は所謂改悟です。どうか私の語ることを暫時聴いて頂きたいです。といふのは、昨夜のことです私がお話するまでもなく、貴女は既に御承知のこと、考へます、何故と申せば、今日お訪ね申した際に、私へ對して、愧を知れといふやう、暗に仰やつた辭に依つて、必ず御承知であると察したのです、恐らく相違あるまいと考へます、ために良心が、頻りに自白せよ、悔悟せよと、苛責しますので遂に勇氣を鼓して懺悔する心になつたのです。

私は昨夜、貴女へ麻酔劑を混入した、ベルモットを勧めまして、遂に貴女の抵抗力を失くして置いて、恣に貴女の堅固な貞操を汚しました、しかし私がこの大膽なる大罪を犯すまでには、同情を買ふべき事情があるのです。何をか隠蔽致しませう、私は貴女を始めて日比谷公園で見ました時から、美しいお姿が、幻のやうに眼に浮むで、唯の一刻も忘れることが出来なかつたのです。けれどもお目に懸るべき機会がないために、堪へぬ思を熟と堪へ忍んでゐたのです。しかるに、斗らずも、この海賓館に於て、偶然再會致しましたので其時の私の歡喜は、譬へるに物がない程でした。血は湧き肉は跳り、情が昂つて、何となく、結ぶの神が、私の戀を遂げさすべく紹介されたやうに思ひました。けれども貴女は既に、藤川といふ歴然たる良夫のある人ですから、未婚時代の如く、私の意の儘に戀を訴へることは許されなくなつてゐたのです。爲に悶々の情を抑へて昨日に到りましたが、日々美しいお顔を見る毎に、遂に辛抱も我慢も、名譽も徳義も、毀譽褒貶も、有ゆるものを顧みる自由を失ひまして、大膽にも無禮にも、大罪を犯して、思の萬分一を果したので

す。就ては法律上は勿論、道徳上赦すべからざる大罪を犯したのですから、かく自白した以上は、嚴罰に處せられるのは覺悟の上ですから、如何やうなりと、貴女の御随意に御處分を願ひます。」

と悔悟の情を語ると共に決心あるものやうに、待罪の意を明かにした。隔てた岩の上に腰を掛けてゐた男は、いつしか進み寄つて、二人の密談に耳を聳てゐた。

清子はやゝ俯向いて靜に聞いてをつたが、やがて四邊を見廻しつゝ、

「御辭の通り、拭ふことならない、汚辱を與へられたことは、昨夜麻酔が覺めると同時に知りましたけれども、尙念のため、貴方の室へ忍び寄つて、ベルモットを少量頂きまして、それを携へて小田原病院へ參りまして、分拆をお願いしたので、其結果愈よ麻酔剤が混入してあつたことが明瞭致しましたから、餘りの恐ろしさに、もう此方に滞在する勇氣がなくなりましたので、明日歸京致す決心になつたのです。しかし私の軀は謂はゞ藤川の軀も同様ですから、許せと仰やつても、私の一存でお許しすることはならないと存じますから、いづれ父と相談致して御挨拶することに

致したうございます。けれども斷じて告訴などは致さない決心でをりますから、其事だけは御安心なまし。」

四十四

黒田等の密談を岩蔭で聞いてゐた男は和り／＼と得意さうに聞いてゐた。兩人は尙も語り續けるのであつた。

「それでは貴女は、私の謝罪を容れないで御尊父へ告げると仰やるのですね。」

黒田が憤慨さうにいつた。

「左様でございます、私の身に取りましては終生の運命に關する一大事件でございますから、親に相談するのは當然だと存じます。」

と判然答へた。

「貴女は法律上の罪に陥さないと仰やるけれども、御尊父が告訴すると仰やれば何うなさる御精神です、貴女も彌張御同意なさるでせう。」

「設令父が告訴すると申しましても、それは飽まで私が止めます、何故かと申せば、貴方には深い怨がありますけれども、良人の名譽、私の面目の爲に涙を呑むでこの儘秘密に葬ります。」

「それならば御尊父へ告げずに、貴女の胸だけに秘め置いて下すつても宜いぢやありませんか、私だつて、多少社會上の名譽は持つてゐますけれども、其名譽を顧みることが出来ないまで、貴女を戀ひ慕つて茲に至つたのですから、其心中を察して下すつたら、他へ漏らさずに秘め置く事がならない道理は無いぢやありませんか、貴女に一點の愛情が無くとも、私には忍ぶ事の出来ないまで、愛情が溢れて罪を犯すに至つたのですから、多少の同情は寄せて下すつても宜からうと思ひます。」

寧ろ怨みがましくいつた。

「それは貴方の御無理と申すものでせう私をかくまで愛してゐて下すつたのなら、何故藤川と結婚爲ない以前に、其事を仰やつて下さいませ、未婚時代にかくまでの御決心があれば、かゝる罪惡をお犯しなさらすとも、公然希望を遂げる途はあるで

はございませんか、それを今日まで唯の一言も仰やらなくて、今日人の妻と成つてからそれも切なる戀をお話してもなさつた上で私が斷乎として拒絶した爲に、止を得ず罪惡を犯しなすつたでも申すのならばですけれど、突然に他に麻酔劑などお飲ませになつて、死人同様な憐れな身にして置いて、汚辱を加へなるといふは、私は決して愛情の在る方とは思はれません……麻酔中に、汚されたと思へば、口惜くて涙が知らず識らず流れます、能くも慘酷な事をなさいましたのね、失禮ながらそんな獸に等しい情慾を遂げて、それでも貴方は御満足でゐらつしやるのですか、それでも紳士として社會にお立ちなさる御精神ですか、私……は、餘り口惜しくて……物が申されません……。」

歎歎しつゝ怨を述べて辱しめるのであつた。

「……………」

黒田は無言のまゝ、やゝ俯目に成つて聞いてゐた。清子は涙を拂ひつゝ、

「それに、女性は殿方と違ひまして、受胎するといふ事がございますが、萬が一そん

な事でもあつたら、如何して下さいませ、私は良人へ對し、世間へ對してはゐられないではございませぬか、ですから親にだけは告げて置かなければ、私の立瀬が無いのでございませぬ。」

黒田は漸く顔を擧げた。

「萬に一つもそれが爲に受胎なさるやうな事があつたら、如何なる責もお引受爲ますけれど、恐く那樣事はあるまいと信じます。しかし、然ういふ御懸念から、飽まで御尊父へ御告げなさる御精神ならば、私は如何なる罰も、貴女の爲なら甘んずる覺悟をりますから御隨意になすつて下さい。」

「私の境遇も御察し下すつて、萬止むを得ない事と御承知を願ひます。」

兩人は話が終つたので、又ぶらぶらと歸るのであつた。夜は十時近い頃であつた。

四十五

黒田と清子とが、元來た道を辿つて、徐り徐りと海賓館を差して歸つて往く後から

見えつ隠れつして、兩人を尾行するのは、先刻岩蔭で立聞してゐた男である。年齢の頃二十七八でもあらうか、學生らしい風も微見えるが、又世の所謂遊人らしい様子も見える、旅館のらしい浴衣を着てゐる點から想像すると、恐らく土地の者ではないらしい。

やがて兩人が海賓館へ入るのを見て、安心したやう合點いて立去つた。而うして町の方へすたくと出かけた。

「悪いことは出来ないものだ、誰知るまいと思つて、安心して話してゐたのが可笑いぢやないか、天知る地知るといふのが、此處のことだ……しかしあの野郎、髯なぞ延して、紳士らしく見せかけてゐるけれども、此方等よりも上手だね、全で西洋の小説にでもありさうなことを、實地に遣つてゐるやアがる何者か知ら……海賓館へ泊つてゐるほどの男だから、屹度相應な奴には相違ないがな、それとなく手蔓をもつて、聞かせて見たら知れるだらう……女は何處かで見たと覺があると思つたら、覺があるのも道理だ、ツイこの春日比谷公園で、躑躅を觀に往つた時、美しい女だと

思つて投込を遣つた、あの女だもの……可愛相だが、俺に見られたのが奴等の不運だ、あれだけの秘密を握つた上からは、先当分は太平樂に暮せるといふものだ、人間と言ふものは、何處で運勢が向いて来るか知れないもんだね、先づこの分ぢや、私の悪運もまだ／＼盡きないと見える。」

會心の笑を洩らすのであつた。かくて彼は川口屋といふ行燈を出した、旅館へ姿を消して了つた。

翻つて、黒田も清子も、旅館へ歸つた時は、既に十時を過ぎてをたつたから、黒田は酒を呼んで悶を慰めてをたつたが、清子は直に服藥の後臥床へ着いた、かくて翌日は匆々行季を納めて歸京して了つた。

黒田は冷に笑を浮べて、

「名譽が惜しいから、必ず告訴なぞする氣遣はないと、それを承知の非常手段だ、訴へるなら訴へて見ろだ……どうして訴へる勇氣があるものか……親父に告げるなんて、そんな脅しを眞に受けるものか、告げるなら告げて見ろだ……左に右罪は犯し

ても思は遂げたのだ。」

誇るが如くにいつた。ところへ女中が新聞や書面など持つて來た。

「藤川の奥様が御歸りなさいましたからお相手がなくしてお淋しうございませうね。」と慰め顔にいつた。

「又其中に變つた相手が来るだらう、願くは藤川さんのやうな美人が來て下れると宜いがね。」笑ひつゝいつた。

「精々さういふお客様をお通し申すやうに致しませうね、しかしお悪戯を遊ばしては困りますよ、藤川様だつて、お一人とお一人とで、あんなに睦じくしてゐらしたたのですもの、随分心配してゐましたわ、ひよつとお間違でも出來ますと、海濱館がお引合に出されなければならぬですからねほゝほ。」

「どうして那樣莫迦なことが出来るものか、先様は立派な主のある御身分ではないか他の客は知らないこと、私のみは自分が保障するから大丈夫だ。はゝは。」

「御自分の御保障では、餘り御當にはならないでございませうね……さう／＼申上げや

うと存じて、ツイ失念してゐましたが、今朝川口屋と申す宿屋の女中が参りまして昨夜八時過に美しい方と、お髯のある御立派な旦那様と御二人連で、濱邊に御出かけなすたさうですが、些と御二方の御名前が承りたいと申して参りましたから、旦那様と藤川の奥様のお名前を知らして遣りましてございますが、どういふ理でございませう。」

四十六

黒田は忽ち眉を擧めて、

「妙な事を問ねに来る人があるのだね、何といふ人が聞に寄來したのか知ら。」

「さア、それは確と存じませんけれど、本町の川口屋さんから、女中衆が問ねに参りましたんですよ。」

「では、誰か私共が濱邊に往くのを見てゐて問に寄來したものに相違ないが、莫迦な事を聞に来る奴があるものだね。」

「屹度お兩方様共、揃つて御立派でゐらッしやいますから、何ういふお方か知らと、物好に聽に参つたのだと存じますわ。」

「何だか知らないけれども、妙な事を問ねに来る人があるものだね。」

「とはいふものゝ、疵持身の何となく不安を感じずにはゐられなかつた。」

「今日も又随分お暑くなりましてございますね、水浴にお出掛け遊ばしませんでございませうか。」

「今日はまだ新聞も読まずにゐるから、午後から出掛けやうと思つてゐるのだ。」

「左様でございませうか、唯今御註文のアイスクリームを、直に持つて参ります。」

と女中は去つて了つた。黒田は女中の持つて來た書面を取上げたが、それは大久保秋子から來たのであつたから、ほく／＼と歡びながら封を披いた。

まだ其地へ御滞在ですつてね、御羨ましく存じますわ、私も母と共に兩三日濱寺へ参りましたけれども思つたほど涼しくありませんから、昨日歸りましてよ、僅か三日ばかりに色が眞黒になりまして、皆なに笑はれましたわ、小田原は避暑に

は、至極適してゐると聞いてをりますから、任意に成るなら御傍へ参つて、共にこの暑が消したいと存じますわ、けれども本年は逆も思ふばかりで、任意にならない事と存じますから、鬼の笑ふ來年をと、楽しんでますわ。

就きまして、御相談申上げたいのは、例の御約束の一條ですがね、もう藤川も菊岡の娘と結婚して、獨逸とかへ参つて了つた事ですから、一日も早く媒酌者を頼むで、申し込むで下さいませんか、實は他から結婚の問題が湧き出て來ましたから、氣が氣でないのです……ですから此際一日も早く申し込んで頂かないと、父があゝいふ氣質ですから、私に相談せずに取極めて了うと眞箇取返しが就かない事に成りますからね、吳々も早速お運びのほどお願ひ申上げます、末筆ながら折角御大切に遊ばしませさようなら

鐵 彦 様

秋 より

と記してあつた。これを読むた黒田は、

「これは安閑としてゐられない、眞箇大久保の叔父は、良縁だと思へば、獨斷で極かねないからね、では早速歸京して、誰が媒酌者を頼むで申込む事に爲やう。」
決心するが否や匆々館牌を呼んで、
「私は至急歸京爲なければならぬ用件が出來たから、これから歸るからね、停車場まで車を命じて貰ひたい。」
と告げた。

「おや、左様でゐらっしゃいますか、大層突然でゐらっしゃいますね。」

「先刻來た郵便で、突然歸らなければならぬ事が出來たのだ、しかし事件が片附けば、直に又來るのだ。」

「どうか成だけお早く御越し下さいましお車は直に申附けますでござります。」

女中は去つた。が間もなく車の用意が整つた旨を告げたので、黒田は匆々歸京した。而うして、豫て親しく交際してをる、脇坂光行といふ、代議士で辯護士を兼てをる紳士を頼むで、大久保家へ公然結婚の申込を爲せたのである。が、この縁談は何の故障

もなく、すらくと纏つて茲に秋子と黒田との婚約は成立したのである。

四十七

菊岡家では、まだ暑中は歸らないものとのみ思つてゐた清子が、一片の通知もなく突然歸つて来たから、母の道子は吃驚して

「まあお前さん、唐突に歸つて来て、どうしたのです、變つたことがあつたのではあるまいね。」

問ひかけた、變つたことの一言は、太く清子の胸に答へたけれども、さあらぬ顔して

「いゝえ、何も變つたことはありませんけれど客が多くて、煩くて堪へられないものですから、俄に歸る氣に成りましたのよ。」

「さうか、さうか、それなれば安心です彼地も随分暑いでせうね。」

「朝夕こそ、いくらか違ひませうけれど日中は随分お暑いのですよ、九十度位上るで

すからね。」

「それでは、二三度位の相違だわね、東京も昨日は九十三度だつたからね、しかしもう暫時だから、少し位の我慢して、九月に成るまでゐて歸ると宜いものに、東京はまだ朝夕だつて、随分暑くて辛抱しかねますよ。」

「だつて、もう體がすつかり全快したのですもの、私ばかり避暑に往くのは、相済みませんわ。」

「そんな遠慮が要るものかね、お前さんは藤川からそれだけのことをして下れるんだもの……小田原が厭たら、鹽原へでもお行きよ、お隣の御夫婦が往つてらつしやるが、全で暑さ知らずだといふおはがきを頂いたのよ。」

「いゝえ、もう九月までと申したところが、僅か二週間ばかりですもの、家で遊んでゐますわ、これまでの夏を思へば、あの間だつて勿體ない位なものですわ。準吉さんはまだ房州から歸らないんですか。」

「学校の始まる三日前に歸るといふはがきを寄來したから、九月の五日頃でなければ

「歸らないだろうよ。」

「さうですか、北條は學生が澤山往つてさうですから、屹度夢中で遊んでゐるのですわ、お父様わ。」

「父様も、一昨日まで一週間休暇をお貰ひなすつて、お休みだつたけれど、昨日から御出勤なさるのよ。しかし半日だけだから、もう彼は御歸りなさるよ。」

「さうですか、お暑いから半日だつて御氣の毒ですわね。」

「だけれども、お前さんが藤川のやうな有望な人と結婚したといふので、今年是非常なお元氣なんだよ、準吉も軍人にしたいから明年は、幼年學校へ入れやうか知らなぞと仰やつてね。……」

「そんなお元氣なら、安心ですわね。」

「眞箇この夏はど氣地の快い夏はありませんよ、これで藤川さへ無事に留學してゐて下れ、ば他に申分はないのだから、私は病氣に罹らないやうにと毎日神佛へお願ひ申してゐますよ……藤川といへば、書面を送つたが届いたでせうね。」

「はア確に届きましたよ。」

「お前さんからも出しましたか。」

「は、直に出しましたわ。」

「書面より外に樂みは無いのだから、度々東京の様子を御知らせなさいよ。」

「は、さう思ひましたから、もうあの書面を頂いてから、五度ばかり出しましてよ、餘り繁々上げたから、却つて御迷惑してゐらつしやるか知れませんか」と面羞げにいつた。

「そんなことがあるものですか、それが夫婦の勤ちやありませんか、何千里隔つてゐるのだから、せめて書面でなりと度々慰めて遣らなければ、お前さんの役目が濟まないわ、彼方から少し見合して下れといつて寄來すほど、毎日でも出してお遣りなさい。」

「豈夫……そんなに出したら、書面で食傷なさるわ。」
果は母子が笑ふのであつた。

四十八

大久保家と黒田との結婚に就いて、媒酌を依頼された脇坂光行は、大阪の大久保家へ往つて、萬事交渉も遂げて歸つて來た、黒田は結果如何にと案じながら、直様客室へ迎へ入れて面會するのであつた。

「どうも御足勞をかけまして恐縮千萬でした、定めて御疲れでしたらう。」

黒田が先づかう挨拶した。

「何しろ汽車中の暑いのには惱されて了つた、日中は百度以上だからね、ははしかし安心爲給へ、役目は立派に爲果せて歸つて來た。」

「それはどうも有難うございます、叔父は宅にをりましたかね。」

「居られました。なか／＼將軍は話せるね、有繋に陸相の候補に擧げられるほどあつて、軍人としては、實に頭腦も明晰なら、辯舌も能辯だし、矢張あゝいふ方は、師團長よりは、陸軍大臣に爲た方が、適任のやうに思はれるね。だから縁談を爲ても

立所に決斷して了はれるから、實に愉快を感じる。斯様々々一通り話を爲たころが令嬢を呼ばれて、鐵彦がお前を貰ひたいといつて來たが、お前の意見はごうぢや、腹藏なくいへど、陸軍的に命令されたのだ、すると令嬢が、私に異存はございませんから、お父様の御意見通りにお任せするといはれたのだ。すると、さうか、それならば遣るといふことに取極めるから、左様心得るが宜いと、この一言で早速事が決定して了つたのだ。實は成功すれば宜いがと、いくらか懸念して出かけたけれども、所謂案するより産むが安くて、我輩も誠に愉快に堪へられなかつた。

就いてはだ、結納は來月一日、結婚は十日といふことに、何も彼も決定して了つたから其心算で準備爲給へ。」

如何にも得意さうに、和々として告げた。

黒田も満面に笑を湛へて、

「何から何まで有難うございました、萬事其豫定で準備致します。」

「能く世の人のいふ辭だが、首尾克相整ひましたといふのは、かゝる場合に用ふべき

辭だと思ふのだ、真箇何から何まで、唯の一度ですらくと滞りなく極つて了つたのだからね。」

「真箇です、これも先生の御盡力の賜物です。」

この脇坂と言ふ男は、法政大學の講師をも兼ねてゐるので、黒田とは師弟の關係があるのである。

かくて黒田は早速料理亭に電話をかけて、酒肴を取寄せた上、心ばかりの祝宴を置いて、脇坂の盡力を慰ふた。而うして兩人がやゝ陶然とした頃であつた。書生が来て、

「先生、失禮ですが、些と御目に懸りたくございます。」

様子ありげにいつた。黒田は直に立つて次の室へ出た。

「何だ、何か急用でもあるのか。」

と急き込むで問ねた。

妙な男が参りまして是非先生にお目に懸りたいといひますから、唯今御來客中だから後刻来て下さいといひましたら、玄關番の癖に生意氣なことをいはなくツても、

先生に取次げといつて、大きな聲を出して怒鳴るのです、どうか些と會つてお遣り下さいませんか。」

ぶる／＼顛へながらいつた、黒田は書生の挨拶の爲やうでも悪かつたのだと思つたので、さして不安の様子もなく、

「それでは些と會つて遣るから、應接室へ通して、丁寧に扱つて置け……」

と、其儘客室へ入つた。書生は主人の命を受けて、件の面會人を應接室へ案内した。

「寸時御待を願ひます。」

と、茶などを進めて退いた。客は無作法に茶を飲むで、珍らしさうに室内の裝飾を見廻すのであつた。

四十九

黒田は客室に歸つて、再び脇坂と酒を酌み交してをつたが、十分も経つたと思ふ頃、玄關の方に當つて、大きな尖り聲が、聞えたと思ふと、書生が眞青の顔をして入

つて来た。

「先刻の客が、何時まで待たせるのだって、大聲を出して為様がございませぬ……。」と告げた。

「失敬な男だね、酒にでも酔つてるのではないか。」

「そんな様子も見えないのです。」

「では、止を得ないから、今直に面會するとさういつて宥めて置くが宜い。」

「承知致しました。」

と書生は慌て、立去つた。すると脇坂は氣を利かして、

「來客だと見えるな、我輩は他に忙しい用件を控えてをるから、これで今日は失敬する、どうか先刻話した通りだから、それまでに準備を整へて置して下さい。」

「委細承知致しました。しかしまだお宜しいでせう客は直に歸して了ひます。」

「實は兩三日不在にしたものだから、用件が山ほど堆積してゐるから、それを解決して又御邪魔に出ます。」

「左様ですか、それは甚だ失禮致しました、此上ながら萬事宜しくお願ひ致します。」と厚く禮を述べて脇坂を送り歸した。かくて直に應接室へ入つた。見れば、一面識もない、風體の賤しい男が、傲然と椅子に腰を掛けて、客の饗應のために供へた卷簾を、無遠慮に喫してゐる。

「私に面會したいといふのは君ですか。」

と黒田が辭をかけた。

「へ、私でござんす、貴方が黒田さんでござんすか。」

「私が黒田鐵彦だが、君は誰方です。」

「申し遅れましたが、私は赤手組青年團の副會頭木下祐天といふ者です、以後お見知置を願ひます。」

「して、面會がしたいといふ用件は、どういふことです、早速聞きたいものですね。」

「お問ねまでもなく、申し上げますが、實は急に入用なことがあつて差文へてをりますから、お金子が百圓ばかり拜借したいと思つて上りました。借りると申した所で、

眞箇は返す力はないのですからどうか頂戴さして下さいませ。」と意外なことをいひ出した。黒田は其顔を瞠めながら、

「私は君にお金を上げる因縁はない筈だが、ひよつと人達でもしてゐるのぢやないですか。」

「いゝえ、確に人違ひではない筈です、貴方は先日まで小田原の海賓館へ避暑に往つてゐられた、あの黒田鐵彦さんと仰やる方でござんせうね。」

「なるほど、先日まで小田原の海賓館へ往つてはゐたが、それがどうしたといふのです。」

「それでは、多いひますと、他に聞えてもなんですから、唯だ一口だけ申しますが十八日の夜の九時頃に、藤川大尉の奥さんと、天狗岩に腰をかけてお話をすつたことを、豈夫お忘れはなさらないでせう、私は彼の時、あのお話を、聞くともなしに、残らず聞いて了ひました。ですから口留料といふも厚皮しい次第ですが、どうか百圓だけお借り申したいものです。」

と弱點を指摘して強請るのであつた。黒田はハツと胸に釘を打たれた如く感じた。同時に悪いことは能ないものだ、熟々恐しさを覺えた。が一大秘密を聞かれた上は、味方に附けて口外させないに如くはないと考へたから、忽ち色を和げて

「さうですか、それではあのお話を聞いたから、口留料に百圓出せといふのですね。能く解りました、それでは唯今といつては手元にないから、明日午前十一時に池上の曙樓まで来て下さい彼處で渡しませう。」

五十

池上本門寺に隣つた、高臺の地に、丹塗の樓閣美しく、四時都人士の節を曳くは有名な曙樓である。其六疊の一室で、酒を酌み交しながら密々話してをるは、辯護士黒田鐵彦と木下祐天の兩人である。

黒田は努めて笑顔を作りつゝ、
「一體君は、何うして小田原へ往つてたのだ。」

と不審さうに問ねた。木下は猪口の酒を少しばかり傾けて、

「小田原には、夫婦約束のある藝妓があるものですから、月に一度や二度は、必ず遊びに出かけるのです。あの日も遊びに往つて川口屋といふ宿に泊つてゐましたが、生憎女が沼津まで客に連れられて、遠出してゐなかつたものですから、濱風にでも當つて來やうと、一人ぶら／＼と濱邊へ出まして、暫時散歩してゐる中に、脚が疲れたものですから、あの天狗岩に腰を掛けて、折柄沓渡る月を眺めて、快い心地に憩んでゐると、俄に話聲が聞えたものですから、不思議に思ひながら、窺ふ様子を見ますと、二間ばかり隔つた、同じ天狗岩に腰を掛けて、睦じさうに密々話す聲が聞えますから、妬け半分に密々忍び寄つて様子を見ますと、ぞつとするほど美しい方と、立派な旦那どが何か混入つた話を爲てる様子に見えましたから、耳を聳て、聽いてをりますと、見かけに依らない、怖ろしい話ですから、人は見かけに寄らないものだと、今更ながら舌を巻て了ひました。しかし私共は然ういふ悪人を懲しめて遣のが目的で、赤手組を作つてゐるのですから、こいつは好い秘密が手に入つた

と、貴下方がお歸りなさる後を尾けて、家を附留に往つたところが、海賓館へお入りなすつたから、翌朝宿の女を頼むで、お名前を問ねに遣つた所が、斯様々々云々の方だと、詳しく分かつたものですから、昨日歸つて來ると早速お宅へ伺つた次第です。」

と問はぬ事まで、べら／＼と物語つた黒田は可厭な奴に聽かれたものだと、眉を顰めながら聞いてゐた。

「しかし、君が秘密を聽いたのを幸ひとして、私を強請に來るのは、少し目先が見えないといふものだ、私は法律を専門にしてゐる辯護士だ、罪を犯すからには、其をいひ解く途は、始めから考へて犯すから、誰が脅喝に來やうが強請に來やうが、そんな事にピクともする人間ぢやない、先方の出やうに依つては、反對に脅迫罪で其筋へ引渡す事も知つてゐるが、しかし成たけ然ういふ事が爲たくないと思ふから、這度だけは君のいふが儘に口留料を出すけれども、今後再びこれを種に強請に來ると、止を得ず我輩の考へ通りにするから、その事を能く承知して、これで口外も爲

なければ、再び強請がましい事は爲ないと誓つて貰ひたいが、誓はれるかね。それが誓はれないといふ事なら、君の勝手に任せる外はないのだ。能く決心して挨拶を給へ。」

と高飛車に出た。

「……………」

木下は無言の儘考へ込むのであつた。黒田は重ねて、
 「まあ能く考へて見給へ、君等は既に其筋から不良青年の悪團體として、絶えず監視を受けてゐる赤手組の團員ぢやないか、我輩は世に紳士として相当敬意を拂はれてゐる身分だから、君が我輩の罪惡を認へて出たところが、豈夫我輩がそんな大膽な罪を犯すとは其筋で思はないから、恐く取上げるものぢやない。のみならず我輩と相手の間には秘密を守る約束があるから、相手を呼出して問ねた處が、事實を否認するに極つてをるから、然うなると君が却つて誣告罪に問はれる位なものだ。此處が即ち目先が見えないといふ所以だよ、どうだ誓ひが出来るかね。」と促した。

五十一

木下は忌々しさうな顔をして聞いてをつたが、有繫にかゝる事には馴れてをるから、屹度思案を定めた様子で、

「お辭は能く解りました、貴方は法律家であらうしやるから、法律の上から論じる時には、無論然ういふ理窟に成るでせうけれど、しかしです、もうかうしてお願ひに出るからには、法律が怖くてはお願ひに上られるものぢやありませんから罷り間違へば、二年と三年食ひ込むのは、承知の上ですけれど、旦那が私の要求を容れて遣ると仰やるからには、お辭に従ひまして、もう今後は決して恣廢事は申しませんから、御安心の上で御渡しを願ひます。」

と答へた。黒田は安心爲たやう、

「君が我輩の辭を容れて、今後斷じて此事を口に爲ないから、口留料を下れといふならば、約束の百圓だけは上げるが、呉々も約束を守つて下れなきや困るよ。」

「御念には及びません、口外爲ないといつたからには、口を裂かれたつて他に話すやうな祐天ぢやありませんから御安心なすつて下さい。」

「それでは、確に受取つて下さい。」

と十圓紙幣十枚を渡した、木下はそれを受取つて改めてをつたが、

「確に十枚ございます、どうもとんだ御無理を申して相濟ないでございます。」

と懐中へ忍ばせた。黒田は不快げに巻巻を喫してゐた。

「では早速ですが、私はこれで失禮致します、どうも大きに御邪魔致しました。」

「もう歸りますか、しかし約束を違へないやうに頼みますよ。」

「へえ……頂戴したお金の在る中は、滅多に約束を違へるやうな事は致しません。」

「何だど！」

「へへへ、滅多に違約は致さないと思したんです。」

黒田の顔を蔑むやうに眺めて、匆々辭し去つて了つた、黒田は茫然として、見送つてゐたが、其心中には、這奴一筋縄では御されぬと覺つたのであつた。

かくて黒田は、酒肴を呼んで、頻りに考へながら獨り傾けてゐた。それは木下に對する今後の處置であつた。

「吁々悪い奴に見入れたものだね……今の口態から想像すると、あの金子を使つて了へば、又強求に來るに極つてを……何しろ監獄に入るのを平氣であるのだからね……何うしたものか知ら……」

暫時猪口を下に……熟と考へるのであつた。

「しかしあゝいふ社會の奴等は、比較的義理の堅いものだから、一度誓つた上は、二度強請には來ないかも知れないが、どうか然うあつて欲しいものだ、だが、先づ來るものと定めて置いて、其防禦手段を講じた方が、安全かも知れない……萬一再び遣つて來た際は、何といつて防いだものか知ら……もう來ないと誓ひながら來るとすれば、先方は無論箸にも棒にもかゝらない、所謂自暴半分に出るに相違ないからそれに對する防衛手段が必要だが、困つた事には、大久保との結婚がもう、確定して了つたのだから、萬に一つも、藤川夫人を、癡醉させて云々と、社會に言ひ觸ら

それでも爲やうものなら、大久保どの婚約は破れて了ふし、辯護士社會からは、弾劾されて了ふであらうし、眞箇社會的制裁の下に葬られて了う理になる……、これを秘密として扱ふには、厭でも苦痛でも、木下の要求を容れて遣る外はないが、限り在る収入をもつて、際限の無い要求に應ずる事は、到底不可能であるから、何か禍根を芟除して了はなければならぬが、良い手段はないものか知ら……」

と、果しもなく、それからそれへと、木下に對する防禦策に腐心するのであつた。

五十二

芝新網町の太竹ひでは、例の松崎八五郎の中に、五郎といふ錠が出来た爲に八五郎との情が愈よ深くなるに連れて、家政は益々困窮に沈むで、細々ながらも日々の生活に困るやうなことはなかつた小商が、今は資金の無い爲に、申譯ばかりの商品を列べて、寧ろ赤手組の指令本部の状態となつて、夜となく晝となく組長の八五郎始め、副組長の本下祐天や、其他の不良青年が集つて、良からぬ相談な爲るばかりでなく、

不良手段で得て来た財物を、酒や肴に換へて、飲めや唄への大騒を演ずることも度々ある。比較的眞面目であつたおひでは、習が性となつて今日では八五郎等のいふこと、爲ることが敢て不良なことゝも思はぬやうになつて、嗜まなかつた酒も飲めば、煙草も喫かす流行歌も唄へば、淫猥な口も利く、眞箇感化されて、墮落の淵に沈むで了つたのである。

今も四五名の不良學生が打集つて、鯨飲馬食の大騒を演じてゐるのである。組長の松崎は、餘程酩酊の様子で、コップからビールをだらりと零しながら、

「おい木下、貴様怪しからん奴だぞ、もう在體に自白爲たつて宜いぢやないかどうも貴様の様子を見ると、餘程の金穴を捜し出したに相違ないが、横須賀から小田原邊へ往つて、何か非常手段を實行して来たのだらう……女でも箱めて来たのか……隠さずにいつ了へよ。」

と語るやうにいつた。木下祐天は、これも熟柿臭い息を吐きながら、

「自白爲なくつても宜いぢやないか、慙うして皆なに奢つてをるんだもの……まあ

「那樣野暮をいはないで、うんと飲むが宜い、いつも奢な酒ばかり飲むのだから、氣が引けて不可へが、今日ばかりはいくら飲むだつて、飲むだけは奢るよ。」
 まあ、奢るといへば、強ひて聞くにも及ばねへが、左に右私が見込むで副組長に爲ただけの腕前は確に在るよ、遣ッ附ける、遣ッ附ろ、熾んに遣ッ附ける。」
 と西洋料理を横咬へにする。するとおひでも煽てるやうに。

「眞箇木下さんは、腕が在るはね、まご／＼してると、組長が叶はないわ……それに感心なのは、何時も扮装を崩さない所が、些と皆なに出來ないことだわ……一昨日も長家續のお新さんが、木下さんに岡惚したつて、散々惚氣をいつてたわ……。」
 「お新といふのは、何處の娘です。」

「ほら、私の家へ時々遊びに来る、姿の美しい高島田に結つた、十八九の娘が在るでせう、御存じなくツて！」

「へえ、そんな美しい女が、この長家にゐるか知ら……。」
 と首を傾げる。

「……ぢや、木下さんは知らないのか知ら……お新さんは能く知つてるのだつてね。」
 「いくら惚て下れても、この長家の連中ちや爲方が無えな……逆倒にして絞つて見たところが、鼻血より出ないからね、それよりも北廓へ繰込むで、彼妓の顔を見た方が、どんなに好い氣地だか知れないです、どうだ皆なこれから往かないか。」

「そいつは愉快だ、君が奢るのなら、大いに往くべしだね。」

松崎が勇み立つ、おひでは忽ち顔色變へて、

「宜い氣なことをおひで無いよ、女房兒の在る癖に、皆さんは獨身ぢやありませんか。往くならこの兒を負つて往らつしやい。」

「主婦さん怒らなくツても大丈夫だよ、組長が往くといつたつて、私が連出す氣遣ひないからね、安心してゐらツしやい。」

「莫迦にしてやがるな、こんな時は獨身が羨ましいね。」松崎が苦笑しながらいつた。

「さあ、皆な奢つて遣るから出かけやう、出かけやう。」木下がいへば、三人の青年は雀躍しつゝ、共に北廓指して出て往つた。

五十三

小田原の海賓館から歸つて来た清子は纖弱の體に相應しからの大患の後であるのに、搗て加へて、黒田の爲に、訴へるにも訴へられない悲しい恥辱を加へられたので、太く神身を勞した結果、又もや二階の一室に閉籠つて、苦しみ病と、堪へられぬ暑とに惱まざるゝのであつた。

しかし清子の病といふは、所謂黒田から受けた、容易ならぬ屈辱が原因を成してをるので、病といふものゝ、胸の惱である。しかも今引籠つてをる八疊の室こそは、最愛の良人藤川が、三年間起居した、最も思出の深い室であるから、一入煩悶の度も強いのである。

「吁、濟まないことをしたね……私の精神には一點濁つた染はないけれども、無理に強ひられたとはいへ、あの麻酔酒を頂いたのが私の過失だつたわ、彼酒さへ頂かなければ那麼恥辱を受けなくて済むだものを……といつて他に話せば、尙更恥辱だし

……終生この秘密を胸に抱えて、煩悶しなければならぬか知ら……。」
 思ひ餘つたやう、深い／＼太息を洩らした。時刻は午に近い頃で太陽は漸く熱烈に加へて来た、ところへ母の道子が上つて来て

「今日は風が死んで了つて、蒸々ど暑いから二階よりも下へ降りて、下の座敷で休んではどうだね……下は思つたよりか冷しいのよ。」と辭をかけた。

「二階もそれほど暑くはないんですよ、私下よりも、矢張お二階で、勝手に寝たり起たりする方が氣樂ですわ。」

「暑くさへなければ、勝手にした方が宜いけれど、餘り蒸暑いものだから、心配して来て見たのよ、氣分は如何です大層悪くはないのかい。」

「はア、悪くはありませんけれど、どうも頭腦が重くて困るんですわ。」

「東京は何といつても暑が烈しいから、せめて少しく涼風の立つまで、小田原にをれば宜いものを……丁度暑い真盛りには歸つて来るんだから、それで一層苦しいのだよ」